

# 「言語A：言語と文学」 指導の手引き

2015年 第1回試験



# 「言語 A : 言語と文学」 指導の手引き

2015 年 第 1 回試験

## ディプロマプログラム (DP)

### 「言語A：言語と文学」指導の手引き

2011年2月に発行、2011年11月、2012年8月、2013年8月に改訂の  
英文原本 *Language A: language and literature guide* の日本語版  
2016年8月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、  
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

**注：** 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。アップデートされた用語がある場合には、ワークショップなどでは最新の用語にそれぞれ読み替えてご利用ください。

非営利教育財団 国際バカロレア機構  
(International Baccalaureate Organization)  
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所  
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd  
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate  
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト：www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2016

国際バカロレア機構（以下、「IB」という。）は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは [www.ibo.org/copyright](http://www.ibo.org/copyright) をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール：sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。



## IBの使命

### IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



# IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

## 探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

## 知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

## 考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

## コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

## 信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

## 心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

## 思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

## 挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化と機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

## バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

## 振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。



# 目次

<b>はじめに</b>	<b>1</b>
本資料の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
「言語A」の学習	5
ねらい	10
評価目標	11
評価目標の実践	12
<b>シラバス</b>	<b>15</b>
シラバス概要	15
「言語A：言語と文学」の指導の方法	16
シラバスの内容	20
<b>評価</b>	<b>27</b>
ディプロマプログラムにおける評価	27
評価の概要－標準レベル（S L）	29
評価の概要－上級レベル（H L）	30
外部評価	31
内部評価	66
<b>付録</b>	<b>79</b>
指示用語の解説	79



## 本資料の目的

本資料は、「言語A：言語と文学」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「言語A」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「言語A」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

## その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

2015年 第1回試験

## ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

### DPのプログラムモデル

DPは、6つの<sup>グループ</sup>教科が中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

## 科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的<sup>クリティカル</sup>な思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題（コースワーク）を課しています。

## プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。「知の理論」（TOK：theory of knowledge）では、批判的<sup>クリティカルシンキング</sup>な思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知なのかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS：creativity, activity, service）は、DPの中核です。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティーを構築するのを後押しします。CASでは、DPの期間を通じて、アカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行います。CASは、創造的思考を伴う芸術などの活動に取り組む「創造性」（creativity）、健康的なライフスタイルの実践を促す身体的活動としての「活動」（activity）、学習に有益であり、かつ無報酬で自発的な交流活動を行う「奉仕」（service）の3つの要素で構成されています。CASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に貢献しているといえるかもしれません。

「課題論文」（EE：extended essay）では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語（日本語の場合は8000字）の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目（「ワールドスタディーズ」の場合は2科目）を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高

いレベルの研究スキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

### 「IBの使命」と「IBの学習者像」

DPでは、「IBの使命」と「IBの学習者像」に示された目的の達成に向かって、生徒たちが必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。DPにおける「指導」と「学習」は、IBの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

## 「言語A」の学習

### 「言語と文学」（グループ1）とは

「言語と文学」（グループ1）は、次の3つのコースで構成されています。

- ・「言語A：文学」
- ・「言語A：言語と文学」
- ・「文学とパフォーマンス」（学際的科目）

具体的には、以下の表のようにまとめられます。

コース名	標準レベル（SL）	上級レベル（HL）
「言語A：文学」	✓	✓
「言語A：言語と文学」	✓	✓
「文学とパフォーマンス」	✓	

上記の3コースはいずれも履修する言語を学習言語として使用した経験のある生徒を対象にデザインされています。しかし、生徒の言語的背景は、1言語のみの話者であるモノリンガルからより複雑な言語の習得歴をもつ者まで、かなり多様であることが少なくありません。テキスト（文学作品と非文学作品のいずれも）の学習は、特定の文章の中はもちろん、文化の中において言語がどのように意味を生成しているかについての理解を深める上での観点を身につけることにつながります。すべてのテキストを「形式」「内容」「目的」「読者」などの要素を通じて理解します。また、テキストを生み出し価値づける社会的、歴史的、文化的文脈、あるいはテキストが生成される特定の状況といった文脈を通じて理解していきます。テキストに向き合ったり、テキストを創造したりすることを通じて、言語がいかに思考方法やもののあり方を維持しているか、あるいは反対に、言語がいかに思考方法やもののあり方に挑戦しているかについての理解を深めることができます。

すべての生徒は、DPの要件を満たすために、上記の3コースから1科目を選択して、履修する必要があります。グループ1で提供されている3つのコースのうち2つを任意の組み合わせで、それぞれ異なる言語で履修することで「バイリンガルディプロマ」を取得することも可能です。「言語A：文学」コースと「言語A：言語と文学」コースには、SLとHLがありますが、グループ1とグループ6の要件を満たす学際的科目である「文学とパフォーマンス」コースはSLでしか履修できません。

グループ1のコースはいずれも、高いレベルの言語能力とコミュニケーションスキルに加え、社会的、美的、文化的リテラシーを高めることを通じて、生徒の将来の学問的な営みをサポートするようにデザインされています。3つのコースで取り扱うテキストには大

きな違いがありますが、コースでの学習には、共通点があります。まったく別個の異なる領域を学ぶというよりは、むしろ、それぞれのコースによって焦点のあてる先に違いがあるのだといえるでしょう。「言語A:文学」コースは、文学批評に関わる文学的<sup>テクニク</sup>な技法についての理解を深め、文学作品を独自に批評する力を育成することを重視しています。「言語A:言語と文学」コースは、意味というものが言語によって構築されていることと、そのプロセスにおける文脈の機能を理解することに焦点を絞っています。「文学とパフォーマンス」は、文学分析とパフォーマンスの役割についての研究を通じて、劇文学を理解していきます。

**注:** 言語の使用、分析、および批判的<sup>クリティカル</sup>な振り返りの到達目標レベルは、3つのいずれのコースでも同一です。

各コースのシラバスと評価の要件は、開講しているすべての言語で同一です。指導および評価は、生徒が履修している言語で行われます。

## 「言語A:言語と文学」とは

「言語A:言語と文学」は、4つのパートから構成されており、そのうち2つでは言語について学習し、もう2つでは文学を学習します。

言語で書かれたテキストを学習することは、言語や文化と能動的にかかわるうえで極めて重要であり、また、このような学習は、私たちの世界の見方やとらえ方にも大きくかかわってきます。「言語A:言語と文学」は、言語とテキストにより形成される意味について問いを投げかけるように生徒を促すことを主なねらいとしています。言語とテキストの意味が単純明快であったり一義的であったりすることは、ほとんどないといえるからです。学習するテキストの言語を注意深く吟味し、その意味を形成している幅広い文脈における各テキストの役割を認識することが、このコースの根幹をなしています。

「言語A:言語と文学」は、生徒のテキスト分析のスキルを養うことをねらいとしています。また、文学であれ非文学であれ、テキストとは、自律的であると同時に、文化によって形づくられる「読み方の慣習」に関係しているものであるという理解を育てることも、このコースの主なねらいです。「言語A:言語と文学」は柔軟に設計されているため、教師は、応用の利くさまざまなスキルを育みながら、生徒の興味・関心を反映するようにコースを構成することができます。テキストの意味を創造するために形式的な要素がどのように使われるかを理解することは、テキストの意味が文化によって形づくられる読み方の慣習、さらには、それがつくられ、そして受け取られる状況から、どのような影響を受けるのかを探究することにつながります。

教師は、コースを構成するにあたって、各テキストの形式的な要素を学習することは、読み方を確立するいくつかの手段のひとつにすぎないという視座を認識しなければなりません。このような視座は、テキストへのアプローチの基盤となります。上述のとおり、テ

クストがつくられ、そして受け取られた状況や、文化によって形づくられる読み方の慣習など、多岐にわたる要因が、形式的な要素と同じように重要だと考えられています。このコースのより広範なねらいは、生徒の「批判的リテラシー」の理解を育むことにあります。

I Bが国際的なプログラムであり、多様な文化の理解を重視しているという性質上、「言語A：言語と文学」は、1つの文化や1つの言語圏の文化において創造されるテキストの学習だけに制限されません。他の文化から翻訳された文学の学習は、I Bディプロマプログラムの生徒にとって特に重要です。グローバルな視点の形成が促され、これによりさまざまな文化が全人類に共通する人生体験にどのような影響を与え、かつ人生体験をどのように形づくっているかという点についての洞察や理解が育まれるからです。

## 標準レベルと上級レベルの違い

「言語A：言語と文学」の構成は標準レベル（SL）と上級レベル（HL）とで共通ですが、両レベルの間にはかなりの量的かつ質的な違いがあります。

文学のセクションでは、HLのほうがSLよりも多くのテキストを取り上げます。言語のセクションでは、一般にHLのほうがSLよりもあらゆる種類の多くのテキストを取り扱うことが期待されています。

SLの2つの評価課題は、HLの課題に比べてかなりやさしい内容です。1つ目はテキスト分析を行う「試験問題1」で、SLの生徒は1つのテキストの分析に取り組みますが、HLの生徒は2つのテキストの比較分析に取り組みます。2つ目は「記述課題」で、HLの生徒は4つの課題を作成しなければなりません、SLの生徒は3つの課題を作成します。HLではこの課題のうち2つが外部評価の対象ですが、SLでは1つの課題のみが外部評価の対象となります。HLで提出される評価課題の1つは、6つの設問のいずれかに答える批判的解答でなければならず、生徒はこの課題用に選んだテキストに含意されている価値観、態度、信念を探究します。

SLとHLの違いは、以下の表のとおりです。「試験問題2」ではSLとHLに共通の設問が出題されますが、異なる評価規準を使用することにより差別化されます。内部評価では、SLとHLで同じ課題と規準を用います。

パート	標準レベル（SL）	上級レベル（HL）
パート1および2： 文化的な文脈における言語、言語とマスコミュニケーション	学習成果を達成するためのトピックがHLよりも少ない。	学習成果を達成するためのトピックがSLよりも多い。
パート3： 文学—テキストと文脈	2作品の学習。そのうち1つは「指定翻訳作品リスト」（PLT）の翻訳テキストを使用する。	3作品の学習。そのうち1つか2つは「指定翻訳作品リスト」（PLT）の翻訳テキストを使用する。

パート	標準レベル (SL)	上級レベル (HL)
パート4： 文学―批判的学習	「言語A」の「指定作家リスト」(PLA)から選択した2作品の学習。	「言語A」の「指定作家リスト」(PLA)から選択した3作品の学習。
記述課題	「記述課題」3つの作成。そのうち1つは外部評価用に提出される。	「記述課題」4つの作成。そのうち2つは外部評価用に提出される。この2つのうちどちらか1つは、6つの設問のいずれかに答える批判的解答でなければならない。
試験問題1： テキスト分析	非文学テキストまたは抜粋1つの分析(1時間30分)。	2つのテキストの比較分析。そのうち1つは非文学テキストを使用する(2時間)。

## 「言語と文学」の事前の学習経験

生徒がグループ1のコースを履修するにあたっての要件はありません。このコースを履修する生徒の言語の習得歴はさまざまであることが多く、マルチリンガル(多言語話者)の場合もあるでしょう。テキストに関する批判的な小論文クリティカル エッセイを書いた経験があることを推奨していますが、そうした経験がないからといって、「言語A」の履修が認められないことがあってはなりません。学校は、生徒への支援について、IB資料『母語以外の言語によるIBプログラム学習』(OCCで入手可能)を参照してください。

グループ1の各コースでは、言語の継続的発達と、テキスト分析や文学鑑賞をめぐる表現など、多様なスキルの習得に取り組みます。グループ1のどのコースを選択するかは、生徒や教師の関心、そして生徒の将来希望する進路などによります。

## MYPとの接続

IB中等教育プログラム(MYP)の「言語A」では、言語と文学のバランスのとれた学習に取り組みます。生徒は、言語と文学の本質や力、美しさへの理解と、言語と文学が世界的に及ぼす多くの影響力への認識を深めます。また、「言語A」では、幅広いジャンルの作品や世界文学の学習と文脈に位置づけられた言語学習を通じて、言語的発達と文学的理解を促します。生徒は、1言語または複数の言語を学習することを通じて、言語能力の可能性を最大限に活かすよう取り組みます。言語と文学は創造的なプロセスであるという理解を得ることにより、自己表現を通じて想像力と創造力を伸ばします。

DPの「言語A：言語と文学」コースは、こうした基礎の上に構築されます。「言語A：言語と文学」は、単に言語の習得を目的としたコースではないものの、生徒の表現力とさまざまな言語領域への理解を継続的に着実に伸ばしていくことを目指しています。

## 「言語A：言語と文学」と「知の理論」

特定の文化的慣習および読み方の慣習は、私たちがテキストの意味を形成する際に重要な役割を果たします。その慣習は時間や場所につれて変化するもので、その変化に従ってテキストの持つ意味も移り変わり、不安定になります。このことは、「知の理論」(TOK)との明らかなつながりをつくっています。例えば、「知識の領域」としての芸術を議論する際、次のような質問を問いかけることができます。「作者あるいは社会的文脈から切り離し、**作品**だけに焦点を絞ることで、芸術に関するどのような知識が得られるか」。

さらに、社会的、文化的、歴史的な文脈を理解し、それを通じて芸術とは何か、芸術の意味とは何かと問いかけることもできます。そして、テキストの意味を見いだす過程における読者や観衆の役割についても考えます。言語と文学をTOKと結びつけることで、生徒たちは多文化的な観点に立って授業で取り上げる作品に向かい合うことを奨励され、自分自身の文化的な「思い込み」を問い直し、視野を広げていきます。

科目とTOKとの間の関係は、ディプロマプログラムの根本をなす要素です。グループ1の「言語A：言語と文学」を学習することにより、生徒は、さまざまな「知のための方法」と「知識に関する問い」について批判的に振り返ることができるようになるでしょう。以下の問いは、TOKと「言語A：言語と文学」との関係に焦点をあてたものです。

- ・ 読者は、テキストの意味をどのように形づくるのか。
- ・ 私たちのテキストの理解は、さまざまな歴史的、社会的、文化的な文脈によってどのように影響されているか。
- ・ テキストは、どのようになると文学と定義されるのか。
- ・ 言語と文学において、意図が単純明白であることは決してなく、暗に価値観や信念を含んでいる。このことは、テキストに向き合う際に、どの程度考慮すべきか。
- ・ 社会の力関係は、何が文学と見なされるかをどこまで決定し、またどこまで規範を定義するのか。
- ・ テキストは、さまざまな批判的立場から分析することができる。このことを鑑みたとき、テキストの有効性は、どのようにすれば相対的に評価することができるといえるか。
- ・ 意味とは本来的に不安定であり、テキストと読者の文脈に左右されるものであるのなら、テキストが何を意味するかをどのようにして見極めることができるのか。

## 「言語A：言語と文学」と国際的側面

「言語A：言語と文学」は複数の言語で提供されているため、さまざまな生徒がこのコースを履修できます。多様な文化の理解を重視するIBの姿勢は、このコース全体に現れています。例えば、シラバスのパート3とパート4では、翻訳作品を学習し文脈を探究することで、文化の境界線を超える時に意味がどのように変化するかを考察します。

## グループ1のねらい

「言語A：文学」（SL・HL）と「言語A：言語と文学」（SL・HL）、「言語A：文学とパフォーマンス」（SL）は、以下を学習のねらいとしています。

1. 異なる時代、スタイル（文体）およびジャンルからの多様なテキストを紹介する。
2. 個々のテキストを綿密かつ詳細に分析し、関連性のあるものと結びつけることができる能力を養う。
3. 表現力（口述および記述によるコミュニケーション）を養う。
4. テキストがつくられ、そして受けとられた文脈の重要性を理解するよう促す。
5. テキストの学習を通じて、文化的背景の異なる人々の異なるものの見方があることや、それらの見方がどのように意味を構成しているかについての認識を促す。
6. テキストの格調高さや、様式的、美的な質の味わいを理解するよう促す。
7. 生徒が言語と文学に対して、生涯にわたって関心および喜びをもつよう促す。

## 「言語A：言語と文学」のねらい

上記に加え、「言語A：言語と文学」コース（SL・HL）は、以下の事項もねらいとしています。

8. 言語、文化および文脈が、テキストの意味の構築のされ方にどのように影響しているかについての理解を育む。
9. テキスト、受け手、目的の間のさまざまな相互作用について、批判的に思考するよう生徒を促す。

## 評価目標

「言語A：言語と文学」コース（SL・HL）には、4つの評価目標があります。

1. 知識と理解
  - 多岐にわたるテキストについての知識と理解を示す。
  - 言語、構成、技法、スタイル（文体）の使用についての理解を示す。
  - 読者が意味を構築する際に用いる多様な方法、および文脈が意味の構築にもたらす影響についての批判的な理解を示す。
  - 異なるものの見方がテキストの読み方にどのように影響するのかについての理解を示す。
2. 応用と分析
  - 目的に適したテキストタイプを選択する能力を示す。
  - 学習するさまざまなテキストタイプに関連する用語を使う能力を示す。
  - 言語、構成、技法、スタイル（文体）が読者に与える効果を分析する能力を示す。
  - テキストがつくられ、そして受けとられた状況が、その意味にどのように影響したかについての認識を示す。
  - 関連性のある事例を根拠として、考えを立証し、正当化する能力を示す。
3. 統合と評価
  - テキストの形式的な要素、内容、文脈を比較・対比する能力を示す。
  - 言語と画像がさまざまなテキストでどのように使われ得るかを論じる。
  - 1つのテキストの中に存在する対立する視点、および1つのテキストについての対立する視点を評価する能力を示す。
  - **HLのみ**：テキスト、文脈、意味のいくつかの側面を評価する批判的解答を作成する。
4. 適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用
  - 記述と口述の両方のコミュニケーションにおいて、考えを明確かつ流暢に表現する能力を示す。
  - さまざまなスタイル（文体）、言語使用域（レジスター）、および状況で、記述と口述の両形式の言語を使用する能力を示す。
  - 論理的かつ焦点の絞られた方法でテキストを論じ分析する能力を示す。
  - **HLのみ**：バランスのとれた比較分析を記述する能力を示す。

## 評価目標の実践

評価目標	どの評価要素で測るのか <small>コンポーネント</small>	評価目標への到達度をどのように測るのか
1. 知識と理解	試験問題 1	生徒は、テキスト分析を行い、1つまたは複数の初めて読むテキストの形式的な要素と内容、および文脈、受け手と目的の重要性についての知識と理解を示すことが求められる。
	試験問題 2	パート 3 で学習した文学作品の中から少なくとも 2 作品について小論文を書く。生徒は、形式、スタイル（文体）、内容、文脈を通じて意味がどのように伝達されるかについての知識と理解を示すことが求められる。
	記述課題	生徒は、学習したテキストについての知識と理解、および特定のテキストタイプに見られる表現技法と形式についての知識と理解を示すことが求められる。
	個人口述コメントリー	パート 4 で学習したテキストからの抜粋についての詳細な知識と理解が評価される。
	口述課題（発展）	生徒は、パート 1 とパート 2 で学習したテキスト、および使用された言語が含意するものについての知識と理解を示すことが求められる。
2. 応用と分析	試験問題 1	生徒は、言語とスタイル（文体）、およびそれが読者に与える効果を分析することが求められる。
	試験問題 2	生徒は、パート 3 で学習した文学テキストを小論文で分析し、文脈が形式的な要素の使用、構成、内容に対してどのように影響を及ぼして与えているかを論じる。

評価目標	どの評価要素で測るのか <small>コンポーネント</small>	評価目標への到達度をどのように測るのか
2. 応用と分析	記述課題	生徒は、テキストがつくられ、そして受けとられた状況が、テキストの意味にどのように影響するかについての認識を示す。
	記述課題 2 (HLのみ)	生徒は、テキスト分析にふさわしい用語を使用する。
	個人口述コメントリー	生徒は、パート 4 で学習したテキストからの短い抜粋を分析し、文学的特徴とそれが読者に与える効果について論評することが求められる。
	口述課題 (発展)	生徒は、テキストを分析し、テキストがつくられ、そして受けとられた状況がテキストの意味にどのように影響するかを探究することが求められる。
3. 統合と評価	試験問題 1	生徒は、1 つまたは複数 (HL) の初めて読むテキストの形式的な要素、内容、文脈を比較し、評価する。これには、テキストの中に存在する対立する視点、およびそれらテキストにまたがって存在する対立する視点の評価が含まれる場合もある。
	試験問題 2	生徒は、少なくとも 2 つのテキストについて論じ、その見解を統合して、内容、文脈、形式、スタイル (文体) の間のつながりを探究する。
	記述課題 2 (HLのみ)	生徒は、特定の複数の文学テキストの中に存在する対立する視点、およびそれらテキストについての対立する視点の評価する。
	個人口述コメントリー	生徒は、パート 4 で学習したテキストからの抜粋の中でどのように言語が使われているかを評価することが求められる。
	口述課題 (発展)	生徒は、1 つのテキストの中に存在する対立する視点、および 1 つのテキストについての対立する視点の評価することによって、テキストを分析することが求められる。

評価目標	<small>コンポーネント</small> どの評価要素で測るのか	評価目標への到達度をどのように測るのか
4. 適切な言葉遣い およびプレゼン テーションスキ ルの選択と使用	試験問題 1	生徒は、自分の考えを明確に表現し、一貫性のある分析を展開することが求められる。HLでは、2つのテキストの間でバランスのとれた分析をしなければならない。
	試験問題 2	生徒は、答案を効果的に構成し、形式に則って言語を使用し、適切に文学用語を使用する能力を示すことが求められる。考えは、明確に表現しなければならない。
	記述課題	生徒は、スタイル（文体）、言語使用域（レジスター）、構成に注意を払うことが求められる。
	個人口述コメントリー	生徒は、口述コミュニケーションを効果的に構成し、考えを明確に伝えることが求められる。
	口述課題（発展）	生徒は、課題にふさわしいスタイル（文体）と言語使用域（レジスター）を選択することが求められる。また、構成を明確に認識しなければならない。

## シラバス概要

シラバスの構成	授業時間数	
	標準レベル (S L)	上級レベル (H L)
<b>パート1：文化的な文脈における言語</b> さまざまなソース（情報源）、ジャンル、メディアからテキストを選択する。	40	60
<b>パート2：言語とマスコミュニケーション</b> さまざまな出典、ジャンル、メディアからテキストを選択する。	40	60
<b>パート3：文学—テキストと文脈</b> S L：2つのテキストを使用する。そのうちの1つは、「指定翻訳作品リスト」(P L T)の翻訳テキストを使用する。もう1つは、「言語A」の学習言語向けの「指定作家リスト」(P L A)のテキスト、または自由に選んだテキスト（ただし「言語A」の学習言語で書かれたもの）を使用する。 H L：3つのテキストを使用する。そのうちの1つは、「指定翻訳作品リスト」(P L T)の翻訳テキスト、もう1つは、「言語A」の「指定作家リスト」(P L A)のテキストを使用する。残りの1つは自由に選ぶことができる。	40	70
<b>パート4：文学—批判的学習</b> S L：2つのテキストを使用する。どちらも、「言語A」の「指定作家リスト」(P L A)から選択する。 H L：3つのテキストを使用する。いずれも、「言語A」の「指定作家リスト」(P L A)から選択する。	30	50
<b>総授業時間数</b>	<b>150</b>	<b>240</b>

「言語A：言語と文学」の要件を満たすには、所定の最低授業時間数が確保されていなければなりません。最低授業時間数は、S Lで150時間、H Lで240時間です。

## 「言語A：言語と文学」の指導の方法

グループ1の3つのコースが重点を置くポイントはそれぞれ異なりますが、いずれも高いレベルの言語能力とコミュニケーションスキルに加え、社会的、美的、文化的リテラシーを高めることを通じて、生徒の将来の学問的な営みをサポートするようにデザインされています。言語と文学は、この3つのコースで中心的な役割を果たしています。生徒に可能な限り積極的にテキストに取り組むよう働きかけることを通じて、生涯にわたる学習を支援します。

これらのコースは、さまざまな指導の方法を取り入れられるようにデザインされています。教師は、コースのねらいと目標を満たすだけでなく、カリキュラムを解釈し、学校とそのコミュニティの状況に応じた授業をつくる上で、かなりの自由度と責任を与えられています。

「言語A：言語と文学」の指導は、「IBの学習者像」、批判的思考と創造的思考のスキル、そして「学び方を学ぶ」というIBプログラムの教育原理に合致した方法に基づいてする必要があります。コースの各段階で、生徒は探究学習にかかわり、批判的思考に必要とされるスキルを身につける機会を与えられなければなりません。

教師は、知識の伝達者というよりも、むしろ、生徒の学習のサポーターと捉えられています。教師は、以下の方法を通じて、生徒自身が「IBの学習者像」を体現し、生徒の学習成果物にも学習者像が反映されるよう促していきます。

- ・ **誰もが参加できる、肯定的で安心できるクラスの学習風土（エートス）を提供する。** 生徒が自信をもって探究し、自分自身の考えを試したり、他者の考えに挑戦したりできるようにします。
- ・ **生徒の力を養う。** 学習者が能動的に学習に参加するアクティブラーニングの多様な方法（ディスカッション、ディベート、ロールプレイ、読書、記述活動および口述プレゼンテーションなど）を用いて、生徒自身がどのようなスキルを身につけたかを示すためのさまざまな批判的および創造的な機会を設けます。
- ・ **生徒は、それぞれさまざまな方法で学習することを認識する。** 授業で取り上げるテキストへの各生徒の理解と喜びを最大限に引き出せるよう、多様な活動や評価課題に取り組みます。
- ・ **批判的言説を促す。** 教師は、コースの初期段階から、生徒が統合的かつ実践的な方法で言語と文学についての批判的言説の言語を習得するよう導きます。
- ・ **芸術の一形式として言語を鑑賞することを促す。** テキストの単なる「解読」にとどまらず、学習するテキストを幅広く人間性豊かに鑑賞する機会をもたらします。

- ・ **生徒が多様なテキストを探究できるようにする。**表現技法、文化および複雑性といった側面において多種多様なテキストを使用します。
- ・ **生徒が文化的な文脈の機微や含意について探究する機会を提供する。**これには、テキストの地理的、歴史的、民族的な側面などが含まれます。
- ・ **言語と文学について記述する機会を提供する。**効果的なフィードバックにより生徒が体系的かつ分析的な記述を行うことをサポートします。
- ・ **テキストについての論理的な比較判断を行うのに必要となるプロセスの足場づくり（スキュフォールディング）を行う。**生徒は口述および記述の両方で比較判断を表現できなければなりません。

教師が以下の側面に重点を置くことも重要です。

- ・ **生徒の基本的スキルの習得を確かなものにする。**基本的スキルは、文学や言語に関する生徒の学習や表現に欠かせません。
- ・ **生徒の学習目標を明確にする。**コースの要件と学習成果を参照しながら、定期的に学習目標について確かめます。
- ・ **体系的な形成的評価を提供する。**生徒のパフォーマンスを向上させるためには何を成すべきかという観点から、特定の評価規準に照らして、定期的にフィードバックを行います。
- ・ **修辭的スキルの実践の機会を設ける。**生徒がさまざまな聞き手に対して効果的な口述プレゼンテーションを行うために必要とされるスキルです。

「言語A：言語と文学」の基本にある考え方は、「批判的リテラシー」という概念に影響を受けています。「批判的リテラシー」は、テキストの意味を決定し、また変化させるうえで文脈が果たす役割の重要性に着目しています。この見地から、コースの指導にあたっては、テキストの意味や、ひいては社会全体との関係性について、一般的に定着している考えに挑戦するようなテキストに取り組むことに重点を置きます。また、形式的な分析を行う際には、「テキストの意味は不変のものではなく、どのような文化的・社会的慣習の中でそのテキストがつくられ、そして受けとられたのかによってある程度左右される」という認識をもたなければなりません。このようなテキストへの取り組み方は、「心を開く人」や「振り返りができる人」といった資質を重視するIBの学習者像の教育理念に則っています。探究を基本としたアプローチは、IBディプロマプログラムの指導と学習の根幹をなしています。

このため教師は、多岐にわたる出典やメディアからのさまざまな記述、口述または視覚的なテキストに対し、生徒が批判的に取り組めるような機会を提供しなければなりません。このことは特に、本コースのパート1とパート2において重要です。どこまで幅広いテキストを入手できるかは、言語によって異なるでしょう。しかし、いかなる場合でも、このコースの全段階を通じてさまざまなテキストのタイプとジャンルが探究されなければなりません。

## コースの構成

I Bの原則では、教師が独自のコースを構成し、生徒および学校独自のニーズや関心を踏まえて指導することが強く推奨されています。以下は、コースを構成する際に踏まえるべき一般的なポイントです。

- ・ 教師はバランスがとれた一貫性のあるコースを構成することを目指します。コースは、生徒の言語習得歴、関心、才能や、教師の目標、関心、専門分野、さらには使用できるリソースの状況や指導環境（クラスの人数など）に合わせて調整できるよう、柔軟に設計する必要があります。
- ・ 学校全体という文脈の中で、教師は適宜、他の科目、特に「知の理論」（TOK）との教科横断的な同時並行学習を進めることに気を配るようにします。
- ・ I Bは、コースの4つのパートを特定の順序で教えることは求めています。ただし、教師は、特定の課題の締め切りや生徒のスキルの発達が、指導の順序に影響を与えることに気づくでしょう。
- ・ 教師は、目標とする学習成果、学習すべきテキストのタイプと範囲、およびコースの各パートの学習に必要な時間を必ず考慮するようにします。
- ・ コースのパート1とパート2の計画を立てる際は、教師が選択するトピックの学習に幅広いテキストとテキストのタイプを組み込みます。「テキスト」の定義は、次ページに記載されています。
- ・ コースのパート3とパート4の計画を立てる際には、2つの重要な作品リストを考慮します。言語ごとに策定されている「指定作家リスト」（PLA）と、すべての言語に共通する「指定翻訳作品リスト」（PLT）です。
- ・ SLの生徒は3つの「記述課題」、HLの生徒は4つの「記述課題」を作成しなければならず、これらの「記述課題」はコースの各パートに関連していなければなりません。教師はこのことを考慮する必要があります。

より詳しい情報は、本資料の「シラバスの内容」や、このコースに関する教師用参考資料を参照してください。

この科目と発行済みの資料における「テキスト」とは、情報の出典となり得るすべてのものを意味し、これには世の中に存在する口述、記述、視覚素材のあらゆるものが含まれます。これには、文章を伴っているかどうかにかかわらず1枚または複数の画像、文学および非文学の記述テキストおよび抜粋、メディアのテキスト（映画など）、ラジオ・テレビ番組とその原稿、およびこれらの領域の多くの側面を共有する電子テキスト（ビデオ共有ウェブサイト、ウェブページ、SMSメッセージ、ブログ、ウィキ、ツイートなど）が含まれます。口述テキストには、朗読、演説、放送、録音された会話を原稿に起こしたものが含まれます。

## スキル

生徒は、このコースで目標とされる学習成果を収めるために、特定のスキルを確実に身につける必要があります。それらの重要性を、以下で説明します。

### 言語スキル

「言語A：言語と文学」は、言語習得を目的とするコースではありませんが、生徒の言語スキルの発達と向上に取り組みます。具体的に生徒は、テキスト分析に適切な語彙を習得すること、明確かつ曖昧さのない言葉で自分の考えを表現する能力を身につけることが期待されています。また、さまざまな受け手と目的を想定した幅広いテキストを作成する過程では、言語使用領域（レジスター）とスタイル（文体）を効果的に使用することが要求されます。加えて、記述と口述の両方のコミュニケーションの能力を示すことも期待されています。

### テキストの詳細分析

「言語A：言語と文学」は、テキストとその文脈の両方が融合することにより、意味がどのように形成されるかという点を重視する科目です。テキストとその文脈との間のつながりについて、情報に基づく理解を促すには、テキストの細かな部分とその特徴を注意深く吟味することが重要です。このため、テキストについて詳細かつ批判的な分析を行う能力は、きわめて重要です。この能力はそれ自体が重要なスキルですが、この能力を使うことで、生徒は、コースで扱うテキストの解釈の有効性を正当化するのに必要な証拠<sup>エビデンス</sup>を収集することができるようになります。このスキルは、特にシラバスのパート4で重点的に取り組まれますが、コースの全パートにわたって重要です。

### 視覚的スキル

「見ること」は、一般的なマルチモーダル・リテラシー（multimodal literacy：複数の感覚を通じた情報処理）の一部です。記述されたテキストは、静止画、動画、および音声と組み合わせて存在する場合があります。生徒が読み、書き、聞き、話すというリテラシースキルを身につける際に、これらのテキストと併用される視覚画像について理解し解釈するスキルを発達させることは重要です。視覚的分析の考察は、「言語A：言語と文学」のコース全体を通して取り上げられます。また、映画などの動画は、コースの各パートで頻繁に使用される可能性があります。「言語A：言語と文学」の教師は、芸術やメディアの教師であることは期待されていませんが、画像をその形式、内容および意味の点から従来の記述されたテキストと同様の方法で分析できることを、生徒に認識させることができます。

## シラバスの内容

### 要件

生徒はSLで最低**4つ**の文学作品、HLで最低**6つ**の作品を学びます。本資料のほかに以下の2つの作品リストが必要です。いずれもOCCで入手可能です。

「指定翻訳作品リスト」(PLT) — すべての「言語A」コースにおいて共通で用いるリストです。

「指定作家リスト」(PLA) — 開講が認められ、IB資料『DP手順ハンドブック』に記載されている「言語A」のコースのそれぞれにPLAがあります。

### 文学テキスト

注：パート3とパート4で同じ作家やテキストを繰り返し扱うことは禁止されています。

### 標準レベル (SL)

生徒は**4つ**の文学テキストを学習することが求められます。

- ・ 2つは、「言語A」のPLAから選択したテキスト
- ・ 1つは、パート3の学習で使用するPLTから選択した翻訳テキスト
- ・ 1つは、「言語A」の学習言語で書かれたテキストで、PLAや他から自由に選択したテキスト

テキストは、「言語A」のPLAの定義に従って、2種類以上の文学ジャンル、2つ以上の異なる年代、また該当する場合は2つ以上の異なる場所から選択しなければなりません。

### 上級レベル (HL)

生徒は**6つ**の文学テキストを学習することが求められます。

- ・ 4つは、「言語A」のPLAから選択したテキスト
- ・ 1つは、パート3の学習で使用するPLTから選択した翻訳のテキスト
- ・ 1つは、PLA、PLT、または他から自由に選択したテキストで、翻訳テキストでもよい

テキストは、「言語A」のPLAの定義に従って、2種類以上の文学ジャンル、2つ以上の異なる年代、また該当する場合は2つ以上の異なる場所から選択しなければなりません。

SLとHLの自由選択のテキストは、文学的な性質を有していて、かつ難易度と複雑さが適切なものでなければなりません。

## 言語のテキスト

シラバスの言語のセクション（パート1とパート2）では、トピックに基づくアプローチをとっています。このため学校は、選択したトピックで言語の役割を探究するのに適したさまざまなテキストを選ぶことができます。このコースを履修する生徒は、さまざまなテキストを作成することが求められています。

## パート1：文化的な文脈における言語

コースのこのパートでは、特定の文化的な文脈において言語がどのように発展するのか、それが世界にどのように影響するのか、また言語が個人と集団のアイデンティティをどのように形成するのかを探究します。知的な刺激を与えるアプローチのためのトピックを以下に示します。それぞれが多岐にわたる語彙とスタイル（文体）を示唆しており、生徒はこれらを習熟しなければなりません。

コースのこのパートを学習する生徒は、意味の構築、および世界の諸問題の理解にかかわる多くの領域において、言語がどのような役割を果たしているのかに注意を払わなければなりません。

「文化的な文脈における言語」の学習は、以下の学習成果を達成することをねらいとしています。

- ・ **受け手と目的がテキストの構成と内容にどのように影響するかを分析する。** 考察すべき領域として、以下のようなものが考えられます。
  - 政治演説における説得するための言語の使われ方
  - SMSメッセージの特徴
  - 植民地独立後のテキストの読み直し
- ・ **言語の変化が与える影響を分析する。** 考察すべきポイントとして、以下のようなものが考えられます。
  - 電子コミュニケーションが意味に及ぼす影響
  - 政府の政策の影響
  - 集団（例えば若者など）の言語から誕生する新しい語彙
  - 語彙と言語そのものの喪失
- ・ **言語と意味が文化と文脈によってどのように形づくられているかについての認識を示す。** 考察すべきポイントとして、以下のようなものが考えられます。
  - 業界用語や専門的言語の使われ方
  - 言語とアイデンティティ形成との関係
  - 標準的な形式の言語と非標準的な形式の言語に与えられる格式
  - 多言語社会における少数民族言語の立場

上記の学習成果は、例えば次のようなトピックのいくつかと関連づけてテキストを学習することにより達成できます。

- ・ ジェンダー（不平等、男らしさや女らしさは何でできているのか）
- ・ 性的指向（その言語を通じた構築）
- ・ 言語とコミュニティ（国家や地域、サブカルチャー）
- ・ 言語と個人（多言語主義や二言語主義、言語習得歴や言語アイデンティティ）
- ・ 言語と権力（言語帝国主義、プロパガンダ）
- ・ 言語の歴史と進化（言語の喪失と復活、クレオール語）
- ・ 翻訳（何を加えられ、何が失われるか）
- ・ 言語と知識（科学と技術、符牒や業界用語）
- ・ 言語と社会的関係（社会的地位、職業的地位、人種）
- ・ 言語と信仰（宗教的な説話、神話）
- ・ 言語とタブー（汚いののしり言葉、ポリティカル・コレクトネス）

## パート2：言語とマスコミュニケーション

パート2では、言語がメディアでどのように使われているかを考察します。マスメディアには、新聞、雑誌、インターネット（ソーシャル・ネットワーキングなど）、携帯電話、ラジオ、映画などが含まれます。このセクションでは、テキストがつくられ、そして受けとられる状況が、その手段となるメディア（媒体）によってどのように影響されるかという問題にも取り組みます。

「言語とマスコミュニケーション」の学習とは、以下の学習成果を達成することを意味します。これらすべてを指導に組み込む必要がありますが、以下で挙げられている例は必ずしも指定というわけではありません。これらの例は、どのようにすればこれらの学習成果をパート2の指導に組み込めるかについて方向性を示すことを目的として提示されています。

- ・ **メディアにおけるさまざまな形式のコミュニケーションを考察する。** 考察すべき領域として、以下のようなものが考えられます。
  - 広告
  - 報道
  - 論説
  - ブログ
  - 携帯メディア
- ・ **教育、政治、イデオロギーがメディアに与え得る影響についての認識を示す。** 考察すべき領域として、以下のようなものが考えられます。
  - 公共放送
  - キャンペーン
  - 検閲
  - 風刺
  - プロパガンダ

- ・ 情報の伝達、受け手に対する説得、あるいはエンターテインメントといった目的のために、マスメディアが言語と画像をどのように使用するかを示す。探究すべきポイントとして、以下のようなものが考えられます。

- 受け手の多様性
- スタイル（文体）と言語使用域（レジスター）の使用
- あからさまなバイアス（偏見）、あるいは隠されたバイアスの形
- レイアウトおよび画像の使用
- 受け手の「受けとり方」を故意に操作すること
- 情報伝達の「場」の選択（誰に、どのように情報を流すか）

上記の学習成果は、例えば以下のようなトピックのいくつかを学習することにより達成できます。

- ・ テクストに見られるバイアス（ニュース報道、スポーツ報道）
- ・ ステレオタイプ（ジェンダー、民族）
- ・ ポップカルチャー（漫画、メロドラマ）
- ・ 演説やキャンペーンの言語およびその見せ方（選挙、ロビー活動）
- ・ 言語と国家（公共的な情報、法律）
- ・ メディア組織（テレビチャンネル、インターネット検索エンジン）
- ・ 編集の役割（ニュース掲示板、ウェブサイト）
- ・ 説得するための言語の使用（広告、要請）
- ・ 芸術とエンターテインメント（ラジオやテレビのドラマ、ドキュメンタリー）

## 補足：パート1およびパート2

テキスト分析とテキスト作成の能力を高めるため、多岐にわたるテキストのタイプを取り上げます。以下はすべてのテキストタイプを網羅するものではありません。

広告	百科事典の項目	パロディー
陳情文	論文	模倣作（パスティーシュ）
伝記	映画・テレビ	写真
ブログ	ガイドブック	ラジオ放送
パンフレット、チラシ	インタビュー	レポート
漫画	手紙（フォーマル）	脚本
グラフ	手紙（インフォーマル）	説明文
データベース	雑誌の記事	歌詞
図解	選挙公約	演説
日記	回顧録	教科書
社説	ニュース報道	旅行記
電子テキスト	論説	

このほか、文学ジャンルもパート1とパート2のトピックの学習に使用することができますが、それを学習の基礎とすべきではありません。文学作品の場合、作品全文より、そこからの短いテキストや抜粋のほうが使用しやすいようです。

## パート3：文学 — テキストと文脈

**標準レベル (SL)：**SLの生徒は、**2つ**の文学テキストを学習します。

- ・ 1つは、PLTからのテキストでなければならない。
- ・ 1つは、PLAや他から自由に選択できるが、「言語A」の学習言語で書かれたテキストでなければならない。

**上級レベル (HL)：**HLの生徒は、**3つ**の文学テキストを学習します。

- ・ 1つは、PLTからのテキストでなければならない。
- ・ 1つは、「言語A」のPLAからのテキストでなければならない。
- ・ 1つは、PLA、PLT、または他から自由に選択することができ、翻訳テキストでもよい。

テキストにおける意味は、文化、そしてそのテキストが作成される状況の文脈によって形づくられます。読み手がもたらすものもまた、テキストの意味を形づくる要素を担います。文学テキストは、「無菌室」の中でつくられるわけではなく、社会的な文脈、文化的な遺産、そして歴史的な変化に影響されます。文学テキストを精読することにより、生徒は、ジェンダー、権力、アイデンティティといった社会の問題と文学との間の関係を考えることができるようになります。また、テキストが、いかに受け継いだ文学と文化的伝統に基づき、そして同時にこれらを変容させているかを考察することが奨励されます。さらに、翻訳テキストを必ず学習することにより、他の言語や文化において創作された作品の考察を通じて自分自身の文化的な前提を振り返ることができます。

「文学 — テキストと文脈」の学習とは、生徒が以下の学習成果を達成することを意味します。

- ・ **特定のテキストが書かれ、そして受けとられた歴史的、文化的、社会的文脈の変化を考察する。** 考察すべき領域として、以下のようなものが考えられます。
  - さまざまな出版形式（例えば連載など）がもたらす影響
  - 政治的圧力と検閲
  - 多数派の社会集団と少数派の社会集団
  - 社会における個人と家族の役割
  - 大勢を占める価値観と信念の影響
  - 抗議と論争

- ・ **テキストの形式的な要素、ジャンル、構成が、どのように意味に影響を与え、また文脈によって影響され得るかを示す。** 考察すべき側面として、以下のようなものが考えられます。
  - 語りの技法
  - 人物描写
  - スタイル（文体）と構成の要素
  - 詩的な言語
- ・ **文学テキストによって表現される態度と価値観、およびそれが読者に与える影響を理解する。** 生徒は以下の点を認識できるようになるべきです。
  - 同じテキストでも非常に異なった読み方ができること
  - 個々の読み手を含め、テキストが受け取られる文脈が、テキストの読まれ方に影響すること
  - 同じテキストの中に異なる価値観が競合する可能性があること

## パート4：文学 — 批判的学習

**標準レベル（SL）：**生徒は**2つ**の文学テキストを学習します。いずれも「言語A」のPLAから選択しなければなりません。

**上級レベル（HL）：**生徒は**3つ**の文学テキストを学習します。いずれも「言語A」のPLAから選択しなければなりません。

精読は、文学を理解し解釈するうえで欠かせない根幹的なスキルであると考えられています。文学テキストの詳細を吟味することにより、生徒は、その構成の豊かで複雑な曲折を認識する能力を育みます。

「文学 — 批判的学習」の学習とは、生徒が以下の学習成果を達成することを意味します。

- ・ **文学作品を詳細に探究する。** 考察すべきポイントとして、以下のようなものが考えられます。
  - テキストで明示および暗示されている意味を理解する。
  - テキストまたは抜粋を作品全体の文脈のなかで特定し、位置づける。
  - テキストの主な特徴、例えば言語、人物描写、構成などに注意を払って鑑賞する。
- ・ **文学テキストのテーマ、倫理的な立場または道徳的価値観といった要素を分析する。** 考察すべきポイントとして、以下のようなものが考えられます。
  - 特定の立場を示している証拠（エビデンス）をテキストの中に見つける。
  - 文学におけるさまざまなジャンルの視点を考察する。

- ・ **文学用語を理解し、適切に使用する。** 以下のような例を含めることができます。
  - 修辞表現
  - 語り手・登場人物
  - 語調
  - 隠喩
  - 反語

## 補足：パート3およびパート4

シラバスのパート3とパート4では、文学ジャンル、年代、および該当する場合は場所に関する要件を満たさなければなりません。SLとHLのどちらにおいても、学校のシラバスのパート3とパート4では、2種類のジャンル、2つの場所、2つの異なる年代を取り上げる必要があります。「年代」と「場所」の定義は、「言語A」のPLAに記載されています。

# ディプロマプログラムにおける評価

## 概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価（external assessment）、および学校内の教師が評価を手がける内部評価（internal assessment）の両方が実施されます。外部評価のための評価課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・「形成的評価」（formative assessment）は、指導と学習の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・「総括的評価」（summative assessment）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主にコース修了時または修了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達規準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、より詳しくはIB資料（英語版）『Diploma Programme assessment: Principles and practice（DPにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPの科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースをIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。教師用参考資料、教科レポート、内部評価の説明や評価規準、他の教師たちから提供される資料などもOCCにアップされています。過去の試験問題やマークスキームはIBストアで購入できます。

## 評価の方法

I Bは生徒の成果物を評価するにあたって、複数の評価方法を採用しています。

### 評価規準

「評価規準」は、オープンエンド型の課題に対して適用されます。各規準は、生徒が身につけるべき特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を表します。評価規準を採用することで、個々のさまざまな解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。各規準は、到達度に関する詳細な説明の項目で構成されています。項目は到達度別に段階的に並べられ、到達度ごとに1つまたは複数の評点が付与されています。また、ベストフィット（適合）モデルを用いて、各規準を個別に適用します。最高評点は規準の重要度に応じて異なる場合があり、各規準について付与された評点を合計したものを、その課題に対する総合点とします。

### マークバンド（採点基準表）

「マークバンド」（採点基準表）は、求められるパフォーマンスの基準を1つにまとめた表です。教師はマークバンドに照らして、生徒の到達度を判断します。全体を1つにまとめた規準を、到達度に沿って段階的な項目に分けています。生徒のパフォーマンスの違いを識別するために、各項目に付与する評点には幅をもたせてあります。個々の到達度について、どの評点を付与するかを確定するには、ベストフィット（適合）アプローチを用います。

### マークスキーム（採点基準）

「マークスキーム」（採点基準）は、特定の試験のために用意された分析的マークスキームを指します。分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために作成されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。このマークスキームには、試験問題の解答で求められる内容や、評価規準をどのように適用するかについての手引きとなる採点のための注意事項などが含まれます。

## 評価の概要 — 標準レベル (SL)

2013年 第1回試験

コンポーネント 構成要素	配点比率
<p><b>外部評価 (3時間)</b></p> <p><b>試験問題1：テキスト分析 (1時間30分)</b> 試験問題は、初めて読むテキスト2つで構成される。 生徒は、そのうちの1つについての分析を書く。(20点)</p> <p><b>試験問題2：小論文 (1時間30分)</b> 生徒は、パート3で学習した文学テキスト両方に基づいて、6つの設問のいずれかに答える小論文を書く。設問はHLと同じものを使用するが、評価規準が異なる。(25点)</p> <p><b>記述課題</b> 生徒は、コースで学習した素材に基づいて、少なくとも3つの「記述課題」を作成する。 そのうち1つを外部評価用に提出する。(20点) この課題は800～1000語(日本語の場合は1600～2000字)とし、それに加えて「課題の解説 (Rationale)」を200～300語(日本語の場合は400～600字)で添えなければならない。</p>	<p><b>70%</b></p> <p><b>25%</b></p> <p><b>25%</b></p> <p><b>20%</b></p>
<p><b>内部評価</b> 以下は、コース修了時に学校内の担当教師による内部評価を実施した後、IBによる外部モデレーション(評価の適正化)を行う。</p> <p><b>個人口述コメントリー</b> 生徒は、コースのパート4で学習した文学テキストからの抜粋について論評する。(30点) 生徒には、「考察を促す問い」(ガイディング・クエスチョン)が2つ提示される。</p> <p><b>口述課題(発展)</b> 生徒は、「口述課題(発展)」を少なくとも2つ完了する。そのうち1つはパート1、もう1つはパート2に基づいたものとする。 「口述課題(発展)」のいずれか1つの得点が、最終評価用に提出される。(30点)</p>	<p><b>30%</b></p> <p><b>15%</b></p> <p><b>15%</b></p>

## 評価の概要 — 上級レベル（HL）

2013年 第1回試験

コンポーネント 構成要素	配点比率
<p><b>外部評価（4時間）</b></p> <p><b>試験問題1：テキスト比較分析（2時間）</b> 試験問題は、初めて読むテキスト2組で構成される 生徒は、そのうち1組についての比較分析を書く。(20点)</p> <p><b>試験問題2：小論文（2時間）</b> 生徒は、パート3で学習した文学テキストのうち少なくとも2つに基づいて、6つの設問のいずれかに答える小論文を書く。質問はSLと同じものを使用するが、評価規準が異なる。(25点)</p> <p><b>記述課題</b> 生徒は、コースで学習した素材に基づいて、少なくとも4つの「記述課題」を作成する。 そのうち2つを外部評価用に提出する。(各課題につき20点) 提出される課題のうち1つは、HLの付加的な学習のために指定された設問の1つに答える批判的解答でなければならない。 各課題は800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）とし、課題1には「課題の解説」を200～300語（日本語の場合は400～600字）で添え、また課題2には短い「概要」を添付しなければならない。</p>	<p><b>70%</b></p> <p><b>25%</b></p> <p><b>25%</b></p> <p><b>20%</b></p>
<p><b>内部評価</b> 以下は、コース修了時に学校内の担当教師による内部評価を実施した後、IBによる外部モデレーション（評価の適正化）を行う。</p> <p><b>個人口述コメントリー</b> 生徒は、コースのパート4で学習した文学テキストからの抜粋について論評する。(30点) 生徒には、「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）が2つ提示される。</p> <p><b>口述課題（発展）</b> 生徒は、「口述課題（発展）」を少なくとも2つ完了する。そのうち1つはパート1、もう1つはパート2に基づいたものとする。 「口述課題（発展）」のいずれか1つの得点が、最終評価用に提出される。(30点)</p>	<p><b>30%</b></p> <p><b>15%</b></p> <p><b>15%</b></p>

## 外部評価

評価課題はすべて、評価規準に基づいて評価されます。評価規準は本資料に記載されています。

「試験問題1」には、4つの評価規準があります。

「試験問題2」には、5つの評価規準があります。

「記述課題」には、4つの評価規準があります。

各評価規準の「レベルの説明」は、「言語A：言語と文学」の評価目標への到達度を測るために規定されたものです。「試験問題1」と「試験問題2」の言語についての評価規準を除いて、筆記試験と記述課題については、SLとHLで異なる評価規準が定められています。

外部評価は、SLとHLの最終評価の70%を占めます。

**注：**筆記試験、口述試験とも、解答はすべて「言語A」の試験言語で行わなければなりません。

## 筆記試験

SL、HLともに、外部評価の対象となる筆記試験が2種類あります。試験では、「言語A：言語と文学」の評価目標に則して、コースのシラバスの特定の分野についての生徒の能力を測ります。「試験問題1」はテキスト分析のスキル、「試験問題2」はパート3で学習した文学作品に関するものです。

いずれの筆記試験においても、生徒は、解答の中で文学テキストか非文学テキスト（「試験問題1」では初めて読む作品の抜粋、「試験問題2」ではパート3で学習した作品）に適宜言及しながら考えを裏付けることが期待されています。作品や抜粋のあらすじや内容をあらためて説明することは、どの評価要素でも期待されていません。

## 記述課題

SLの生徒は、800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）の「記述課題」を1つ提出し、コースで学習した素材のある1つの側面を探究します。HLの生徒は、各800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）の「記述課題」を2つ提出します。

## 指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

外部評価のために提出されるSLとHLの「記述課題」は、生徒本人が取り組んだ学習成果物でなければなりません。しかし、学習成果物が「生徒本人が取り組んだものである」ことは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援をいっさい受けずに、独自に課題に取り組まなければならないということではありません。教師は、生徒が課題を計画する段階と課題に取り組んでいる間の両方にわたって、重要な役割を果たすべきです。

以下の点を生徒にきちんと理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準（生徒は、評価課題を通じて与えられた評価規準に効果的に取り組むべきことを理解しなければなりません。）

教師は、最初に課題について生徒と話し合わなければなりません。教師は、生徒が「言語A：言語と文学」のどの側面を課題に盛り込むかを決定するにあたり、焦点が絞られた適切な側面を選べるよう促すべきです。生徒は、自分の課題の目的を定義し、その目的に最もふさわしいテキストタイプを選ばなければなりません。そして、適切な言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）も決定しなければなりません。

教師は、生徒がアドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。教師に指導を求めたことを理由に減点してはなりません。ただし、課題を完成させるにあたって教師から相当量の助けを要した場合は、IB資料『DP手順ハンドブック』の規定に則って課題の提出時にその旨を報告してください。

教師には、学問的誠実性に関する概念、特に課題が本当に生徒本人が取り組んだものであること、および知的財産についての基本的な意味と重要性をすべての生徒に確実に理解させる責任があります。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、学習成果物が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。

学習プロセスの一環として、生徒は、課題の最初の草稿を作成した段階で教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高められるかについてであり、教師が草稿に注釈をつけたり、編集を加えたりすることは認められません。この第1稿に全般的なコメントをした後は、教師がさらに援助することはできません。

モデレーション（評価の適正化）または評価のためにIBに提出されるすべての学習成果物は、本当に生徒本人が取り組んだものであることを教師が認証しなければなりません。また、決して規則違反の事実またはその疑いがあることはなりません。各生徒は必ず学習成果物が自分自身のものであること、またそれが最終版であることを正式に認めなければなりません。生徒が正式に教師（またはDPコーディネーター）に最終版を提出した後は、学習成果物を撤回することはできません。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と学習成果物の内容について議論することと、次のいずれか（または2項目以上）を精査することにより確認します。

- ・ 生徒の最初の案
- ・ 「記述課題」の最初の草稿
- ・ 引用・参考文献
- ・ 生徒自身が書いたものであることが確認されている他の学習成果物とのスタイル（文体）の比較

学習成果物について生徒本人が取り組んだものであると教師と生徒が認証することは、評価の適正化を図るために試験官にサンプルとして提出する学習成果物だけに適用されるものではありません。すべての生徒の学習成果物に適用されます。生徒または教師が学習成果物について生徒本人が取り組んだものであることを認証できない場合、その学習成果物は採点対象外となります。その項目の評点は与えられず、成績評価も与えられません。詳細は、IB資料『学問的誠実性』と同『一般規則：ディプロマプログラム』を参照してください。

## 外部評価の詳細 — 標準レベル（SL）

### 試験問題1：テキスト分析

所要時間：1時間30分

配点比率：25%

「試験問題1」には、生徒が初めて読む非文学テキストからの分析用の抜粋が2つ含まれており、そのうち1つを生徒が選択します。生徒はその1つのテキストについての分析を書くよう指示され、考えられる文脈、受け手、目的、言語的・文学的技法を使用することの重要性について論評します。

また、「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）が**2つ**提示され、生徒はテキストのいくつかの側面を重視して解答するよう促されます。分析のためのテキストは、記述物や視覚テキストの全文または全体であることもあれば、長い作品からの抜粋であることもあります。分析のためのテキストは、シラバスの特定のパートに関係している必要はありません。さまざまな種類の非文学テキストを使うことができ、例えば以下のようなものが含まれます。

- ・ 広告
- ・ 論説
- ・ 論文からの抜粋
- ・ 電子テキスト（SNSサイトやブログなど）
- ・ パンフレット（公共情報の冊子など）
- ・ 回顧録、日記、自伝的テキストからの抜粋

生徒は、考えられる受け手や目的についての理解を示しながら、テキストを分析し、論評しなければなりません。これを達成するには、テキストタイプ、文脈、バイアスやイデオロギー上の立場といった側面に加え、構成、言語、スタイル（文体）を分析する必要があります。

テキスト分析に適切なアプローチは多数あります。しかし、どのアプローチをとるとしても、分析は一貫性があり、きちんと構成されていて、かつテキストから得た関連性のある例を含んだものでなければなりません。形式的な側面を単純に列挙するのではなく、それらの側面が特定の効果を生み出すためにどのように使われているかに焦点をあてて、その認識がテキストの読み方にどのように影響し得るかを論じなければなりません。

この試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「試験問題1」の最高点は20点です。

## 試験問題2：小論文<sup>エッセイ</sup>

所要時間：1時間30分

配点比率：25%

「試験問題2」は、「言語A：言語と文学」のパート3で学習した文学テキストに基づく6つの設問で構成されます。生徒は、これらの設問のいずれか1つに答えなければなりません。

「試験問題2」の形式と6つの設問はSLとHLで同じですが、レベルごとに異なる評価規準が設けられていて、生徒の解答に期待される複雑さや詳細さの違いを反映しています。

生徒は、設問に答えることで、このコースのパート3で要求される学習の成果を示すよう期待されています。授業で学習した2つのテキスト両方に言及しながら、テキストがつくられ、そして受けとられた文脈がテキストの意味にどのように影響するかという観点から作品を分析しなければなりません。この評価課題の準備を行う授業において生徒が考察しなければならぬ論点の例を、以下に示します。

- ・ 文脈や年代の違いを超えて特定の作品が関心を集め続けることを、私たちはどのように説明できるだろうか。
- ・ テキストの意味は固定化されたものであり、時代を経て変化することはないという主張について、どのように考えるか。
- ・ 美が相対的なものであるとすると、授業で学習した作品はこの考え方をどのように探究しているだろうか。
- ・ 文学は抑圧された人々の声であるという主張は、どの程度有効か。
- ・ 文学作品で描かれる男女の登場人物は、社会における男女の役割をどの程度正確に反映しているか。
- ・ 作家が時として文学作品において出来事を起こった順序どおりに書かないことがあるのは、どのような目的のためか。
- ・ 文学的価値のある作品は、時代の精神を反映するものであると同時に、それに挑戦するものでもあるのだろうか。

これらのアイデアの代わりに、HL用に示された例も使うことができます。

この試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「試験問題2」の最高点は25点です。

## 記述課題

### 配点比率：20%

「記述課題」は、生徒がコースで学習した素材の1つの側面を探究する際に、想像力に富む方法を用いることができるかを測るものです。生徒は、テキストまたはトピックのある1つの側面について、批判的に取り組むことが求められます。

生徒は、少なくとも3つの「記述課題」を作成し、そのうち1つを外部評価用に提出します。

「記述課題」は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「記述課題」の最高点は20点です。

## 形式的要件

### 教師による指導およびサポート

学習プロセスの一環として、生徒は、課題の最初の草稿を作成した段階で教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高められるかについてであり、教師が草稿に注釈をつけたり、編集を加えたりすることは認められません。この第1稿に全般的なコメントをした後は、教師がさらに援助することはできません。

3つの課題の内容は、それぞれコース内の異なるパートに関連したものでなければなりません。したがって、少なくとも1つの課題をパート1かパート2に関連させ、少なくとも1つの課題をパート3かパート4で学習した文学テキストに関連させる必要があります。

生徒は、取り上げる領域と具体的なタイトルを決定したあと、適切であればどのようなタイプのテキストでも自由に作成することができます。例えば、パートで扱ったジェンダーに関する表現を議論する「記述課題」は、新聞の社説のような形式で書くことができます（下表の例を参照）。また、学習した小説の登場人物が書いた架空の日記を「記述課題」にすることもできます。

学習成果	トピック	コースの パート	課題の テキスト タイプ	課題のタイトル
メディアが政治とイデオロギーに及ぼす影響 情報の伝達、受け手に対する説得、あるいはエンターテインメントを目的とした、マスメディアによる言語と画像の使用方法	ステレオタイプ 家庭用品の広告におけるジェンダーの表現	パート2	新聞の社説	「母、妻、キャリアウーマン、女中—女性の仕事とは何か。」  「課題の解説」において、新聞の立場と、意見を提示するための言語の使い方について説明する

**注：**小論文は、この課題のテキストタイプとしては認められません。小論文は、「試験問題2」で書くことが義務づけられています。

この課題は、「課題の解説」を含まず800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）とします。「課題の解説」は200～300語（日本語の場合は400～600字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、「記述課題」の最初の1000語（日本語の場合は2000字）と「課題の解説」の最初の300語（日本語の場合は600字）のみを評価の対象とします。

## 課題の解説 (Rationale)

「課題の解説 (Rationale)」は「記述課題」の語数（字数）（800～1000語）（日本語の場合は1600～2000字）には含まれません。長さは200～300語（日本語の場合は400～600字）とします。「課題の解説」に記載されるテキストのタイトルやトピックは、カバーシートと合致する必要があります。

課題の解説では、生徒は以下のことを説明します。

- ・「記述課題」の内容が、コースの特定のパートにどのように関連づけられているか。
- ・この課題では、コースの特定の側面をどのように探究することが意図されているか。
- ・選択した課題の性質
- ・受け手、目的、およびこの課題を取り巻くさまざまな文脈についての情報

「課題の解説」には、学習したテキストやトピックについての知識を盛り込むだけでなく、作成したテキストで用いた表現技法、およびそれが課題のねらいにどのように関係するかについての情報も含むべきです。

## 実践時の要件

生徒は、必要に応じて成果物をサポートする画像を挿入することができます。これらは必ず課題の電子ドキュメントの中に組み込まなければならない、別のファイルとして作成したりハードコピーを添付したりすることはできません。評価用に提出する「記述課題」はワードプロセッサで作成し、電子ファイルは画像を含めて2MB以下に収めます。

課題は、「言語A」の学習言語で執筆します。

また、使用した情報源はすべて明示しなければなりません。文学テキストの主要な一節やイラストをはじめ、議論を喚起する素材を読み手が参照しなければ「記述課題」で生徒が達成しようとしていることを理解できない場合など、必要に応じてその出典を参考文献目録で明示しなければなりません。試験官がこれらの文書を参照する可能性はありますが、評価の対象とはなりません。とはいえ、試験官にとって重要な情報です。また、これは、生徒が優れた学問的慣習を身につけることにもつながります。

## 教師の役割

- ・ 課題の選択、発展方法、難易度について生徒にアドバイスする。
- ・ 「記述課題」と議論を喚起する素材との間の関係を話し合う。
- ・ トピックが、難易度、課題の語数（字数）、課題の目的のすべてにおいて適切であることを確認する。

## 「記述課題」の例

「記述課題」のタイプとして考えられる例を、以下に示します。これらはあくまでも参考例であり、「記述課題」のタイプをすべて網羅したものではありません。また、これらの中からいずれかのタイプを選ばないといけないということはありません。

- ・ 特定の社会集団にステレオタイプをあてはめることの危険性を示す新聞記事
- ・ ある小説の始まりの時点よりも前に起こった出来事を描いたエピソード（これによって小説の冒頭に文脈がもたらされる）
- ・ 架空の登場人物2人間の人間関係の変化を示す、ある登場人物から別の登場人物への手紙
- ・ 広告がいかにか蔓延しているか、また、会社の利益を拡大するためにブランドがいかにか宣伝されているかを訴える論説

## 外部評価規準 — 標準レベル（SL）

### 概要

評価課題はすべて、評価規準に基づいて評価されます。評価規準は本資料に記載されています。SLとHLでは、異なる評価規準が適用されます。

SLにおける外部評価規準の概要は以下のとおりです。

### 試験問題 1：テキスト分析

SLでは、4つの評価規準があります。

規準A	テキストについての理解	5点
規準B	スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解	5点
規準C	構成と展開	5点
規準D	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>20点</b>

### 試験問題 2：小論文

SLでは、5つの評価規準があります。

規準A	知識と理解	5点
規準B	設問に対する答え	5点
規準C	スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解	5点
規準D	構成と展開	5点
規準E	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>25点</b>

### 記述課題

SLでは、4つの評価規準があります。

規準A	課題の解説	2点
規準B	課題と内容	8点
規準C	構成	5点
規準D	言語とスタイル（文体）	5点
	<b>合計</b>	<b>20点</b>

教師と生徒の参考用に、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

## 試験問題 1：テキスト分析（SL）

### 規準 A：テキストについての理解

- ・ 分析は、テキストとそのタイプ、目的、考えられる文脈（文化的な文脈、時代の文脈、受け手との関係など）についての理解を、どの程度示しているか。
- ・ 論評は、テキストへの言及によって裏づけられているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	テキストと文脈についての理解がほとんど見られない。論評がテキストへの言及によって裏づけられていない。
2	テキストと文脈についての理解がいくらか見られる。論評がテキストへの言及によってときどき裏づけられている。
3	テキストと文脈についてのまずまずの理解が見られる。論評の大部分が、テキストへの言及によって裏づけられている。
4	テキストと文脈についての優れた理解が見られる。論評がテキストへの言及によって一貫して裏づけられている。
5	テキストと文脈についての非常に優れた理解が見られる。テキスト内の適切な箇所と言及することにより、洞察力のある論評を一貫して裏づけている。

### 規準 B：スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解

- ・ 分析は、テキストのスタイル（文体）上の特徴、例えば言語、構成、語調、技法、様式などが、意味を構築するのにどのように使われているかについての認識を、どの程度示しているか。
- ・ 分析は、スタイル（文体）上の特徴（視覚テキストの特徴を含む）が読者に与える効果についての理解を、どの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	スタイル（文体）上の特徴についての認識や理解がほとんど見られない。
2	スタイル（文体）上の特徴についての認識や理解がいくらか見られる。
3	スタイル（文体）上の特徴についてのまずまずの認識とその効果についてのいくらかの理解が見られる。

評点	レベルの説明
4	スタイル（文体）上の特徴についての優れた認識とその効果についてのまずまずの理解が見られる。
5	スタイル（文体）上の特徴についての非常に優れた認識とその効果についての優れた理解が見られる。

### 規準C：構成と展開

- ・ 分析をいかにうまく構成し、一貫性を保っているか。
- ・ 答えの議論を、どの程度展開させているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	構成がほとんど見られず、分析というよりも言い換えや要約に終始している。
2	構成がいくらか見られ、分析にある程度の一貫性もあるが、言い換え、要約、単純な説明の要素も含んでいる。議論がほとんど展開されていない。
3	分析が十分に構成されていて、おおむね一貫性がある。議論がいくらか展開されている。
4	分析がよく構成されていて、大部分において一貫性がある。議論が十分に展開されている。
5	分析が効果的に構成されていて、一貫性がある。議論が高度に展開されている。

### 規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	言葉遣いは、ときどき明確かつ注意深く選択されている。文法、語彙、構文は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も多少の誤りはあるものの十分に正確である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。

評点	レベルの説明
4	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。
5	言葉遣いは非常に明確であり、効果的に、かつ注意深く選択されており、的確である。文法、語彙、構文もきわめて正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。

## 試験問題 2：小論文（SL）

### 規準 A：知識と理解

- ・ 答えた設問に関連させて、パート 3 の作品とその文脈についての知識と理解をどの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	パート 3 の作品についての知識がほとんど示されていない。
2	パート 3 の作品とその文脈についての知識がいくらか示されているが、理解は限定的である。
3	パート 3 の作品とその文脈が意味にどのように影響を及ぼすかについての十分な知識が見られ、おおむねの理解が示されている。
4	パート 3 の作品とその文脈がどのように意味に影響を及ぼすかについての相当な知識と優れた理解が示されている。
5	パート 3 の作品とその文脈がどのように意味に影響を及ぼすかについての徹底した知識と非常に優れた理解が示されている。

### 規準 B：設問に対する答え

- ・ 設問の主な意図をどの程度理解しているか。
- ・ 答えは、設問の意図にどの程度関連づけられているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	設問の主な意図に対する認識がほとんど見られない。
2	設問の主な意図に対する認識がいくらか見られる。大部分の答えが根拠のない一般論になっている。
3	設問の主な意図に対する十分な認識が見られる。おおむね関連性の高い答えになっている。

評点	レベルの説明
4	設問の主な意図に対する優れた認識が見られる。大部分は関連性の高い答えになっている。
5	設問の主な意図に対する非常に優れた認識が見られる。一貫して関連性の高い答えになっている。

### 規準C：スタイル（文体）上の特徴とその効果についての理解

- ・ 小論文は、「そのテキストで著者がどのようにスタイル（文体）上の特徴（例えば、語り手の視点、設定、人物描写、構成、スタイル（文体）、技法など）を選び、意味を構築するために使用しているかについて」の認識を、どの程度示しているか。
- ・ 小論文は、「スタイル（文体）上の特徴の効果について」の理解を、どの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	スタイル（文体）上の特徴についての認識と例証がほとんど見られない。
2	スタイル（文体）上の特徴についての認識と例証がいくらか見られる。
3	スタイル（文体）上の特徴についての十分な認識と例証、およびその効果についてのいくらかの理解が見られる。
4	スタイル（文体）上の特徴についての優れた認識と例証、およびその効果についての十分な理解が見られる。
5	スタイル（文体）上の特徴についての非常に優れた認識と例証、およびその効果についての優れた理解が見られる。

### 規準D：構成と展開

- ・ 小論文の議論は、どの程度効果的で、かつ一貫性を保っているか。
- ・ 小論文の形式的な構成は、どの程度効果的か。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	ほとんど焦点が絞られておらず、構成と展開がほとんど見られない。
2	やや焦点が絞られていて、構成と展開がいくらか見られる。
3	十分に焦点が絞られていて、十分な構成と展開が見られる。
4	よく焦点が絞られていて、優れた構成と展開が見られる。
5	非常によく焦点が絞られていて、非常に優れた構成と展開が見られる。

## 規準 E：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	言葉遣いは、ときどき明確かつ注意深くに選択されている。文法、語彙、構文は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も多少の誤りはあるものの十分に正確である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。
4	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も優れて正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。
5	言葉遣いは非常に明確であり、効果的に、かつ注意深く選択されており、的確である。文法、語彙、構文もきわめて正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。

## 記述課題（SL）

### 規準 A：課題の解説

- ・ 「課題の解説」は、探究するコースの側面と「記述課題」の関連性を説明しているか。

**注：**「課題の解説」の語数（字数）は 200 ～ 300 語（日本語の場合は 400 ～ 600 字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、1 点減点されます。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	探究する側面についての説明と理解がいくらか示されている。
2	探究する側面についての明確な説明と理解が示されている。

## 規準B：課題と内容

- ・「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解を、どの程度示しているか。
- ・選択した課題に対して内容はどの程度適切か。
- ・選択したテキストタイプで使われる表現技法についての理解を、どの程度示しているか。

「試験問題2」で作成されるような小論文は、「記述課題」のテキストタイプとしては適切ではありません。このような小論文を提出した場合、この規準での高得点はのぞけません。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解がほとんど示されていない。 選択した課題に対しておおむね不適切な内容である。 選択したテキストタイプで使われる表現技法についての理解がほとんど示されていない。
3～4	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解がいくらか示されている。 選択した課題に適切な内容が部分的にしか含まれていない。 選択したテキストタイプで使われる表現技法についての理解がいくらか示されている。
5～6	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する十分な理解が示されている。 選択した課題に対しておおむね適切な内容である。 選択したテキストタイプで使われる表現技法についての十分な理解が示されている。
7～8	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する優れた理解が示されている。 選択した課題に対して一貫して適切な内容である。 選択したテキストタイプで使われる表現技法についての優れた理解が示されている。

## 規準C：構成

- ・「記述課題」をいかにうまく構成しているか。
- ・構成にどの程度一貫性があるか。

**注：**「記述課題」の語数（字数）は800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、2点減点されます。

評点	レベルの説明
0	成果物が、以下に記す基準に達していない。
1	まとまりや構成がほとんど見られない。
2	まとまりがいくらか見られる。何らかの構成はあるが、一貫していない。
3	まとまりがある。何らかの構成はあるが、一貫性がない。
4	まとまりがある。構成はおおむね一貫性がある。
5	うまくまとめられている。構成は一貫性がある。

### 規準D：言語とスタイル（文体）

- ・ 言語とスタイル（文体）をどの程度効果的に使用しているか。
- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、慣用句などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ。レジスターは課題自体について評価される）。

**注：**適切な「課題の解説」を書いたものの、「記述課題」で適切な言語使用域（レジスター）を使用しなかった場合は、最高点が3点となります。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	課題はほとんど明確さに欠け、基本的な誤りが随所に見られる。レジスターとスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	課題にいくらかの明確さはあるものの、文法、スペル（誤字脱字）、構文はしばしば不正確である。レジスター、スタイル（文体）、適切な語彙についての認識がいくらか見られる。
3	言葉とスタイル（文体）はおおむね明確かつ効果的に使用されているが、文法、スペル（誤字脱字）、構文はやや不正確である。レジスター、スタイル（文体）、語彙はおおむね適切である。
4	言葉とスタイル（文体）が明確かつ効果的に使用されており、精度も高い。構文と語彙に幅があり、スタイル（文体）の成熟度を示している。レジスターも適切である。
5	言葉とスタイル（文体）が非常に明確かつ効果的に使用されており、精度も非常に高い。構文と語彙が優れており、スタイル（文体）に自信が感じられる。レジスターも効果的である。

## 外部評価の詳細 — 上級レベル（HL）

### 試験問題 1：テキスト比較分析

所要時間：2時間

配点比率：25%

「試験問題 1」には、生徒の比較分析用に、生徒が初めて読むテキストが 2 組含まれています。テキストの組み合わせは、非文学テキスト 2 つの場合と、文学テキスト 1 つと非文学テキスト 1 つの場合があります。文学テキストが 2 つ組み合わせられることはありません。どちらの組み合わせにおいても、2 つのテキストの間に何らかの関連性をもたせることで、テキスト間の類似点と相違点を探究できるようにしています。生徒はどちらか 1 つの組についての比較分析を行い、テキスト間の類似点と相違点、考えられる文脈、受け手および目的の重要性、言語的・文学的技巧の使用について論評します。

テキストは、記述物の全文や長い作品からの抜粋、またはその組み合わせとなる場合もあります。テキストの出典はすべて明示されます。2 組のうちのどちらかに、視覚テキストが 1 つ含まれる場合もあります。これは 1 つの画像の場合もあり、文章を伴っていることもあれば、伴っていないこともあります。分析のためのテキストが、シラバスの特定のパートに必ずしも関連しているわけではありません。

テキスト間の関係性はさまざまで、テーマ、ジャンルの特徴、語り手の立場の違いなどがあり得ます。さまざまなテキストタイプが出題されます。以下はその一例です。

- ・ 広告
- ・ 論説
- ・ 論文からの抜粋
- ・ 電子テキスト（SNS サイトやブログなど）
- ・ パンフレット（公共情報の冊子など）
- ・ 回顧録、日記、自伝的テキストの抜粋
- ・ 詩
- ・ 脚本からの抜粋
- ・ 小説または短編小説からの抜粋
- ・ 報道写真
- ・ 風刺漫画

生徒は、受け手や目的についての理解を示しながら、テキストを比較分析し、論評しなければなりません。これを達成するには、テキストタイプ、文脈、バイアスやイデオロギー上の立場といった側面に加え、構成、言語、スタイル（文体）を分析する必要があります。

比較分析では、一貫性のある構成を組み立て、テキストからの関連性のある事例を示したうえで、テキスト間の類似点と相違点についてバランスのとれた論評を展開しなければなりません。形式的な側面を単純に列挙するのではなく、それらの側面が特定の効果が生み出すためにどのように使われているかに焦点をあてます。

この試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「試験問題1」の最高点は20点です。

## 試験問題2：小論文<sup>エッセイ</sup>

所要時間：2時間

配点比率：25%

「試験問題2」は、「言語A：言語と文学」のパート3で学習した文学テキストに基づく6つの設問で構成されます。生徒は、これらの設問のいずれか1つに答えなければなりません。

「試験問題2」の形式と6つの設問はSLとHLで同じですが、レベルごとに異なる評価規準が設けられていて、生徒の解答に期待される複雑さや詳細さの違いを反映しています。

生徒は、設問に答えることで、このコースのパート3で要求される学習の成果を示すよう期待されています。授業で学習した2つのテキスト両方に言及しながら、テキストがつくられ、そして受けとられた文脈がテキストの意味にどのように影響するかという観点から作品を分析しなければなりません。この評価課題の準備を行う授業において生徒が考察しなければならない論点の例を、以下に示します。

- ・ テキストから除外された社会集団はどれか。これはテキストが書かれた文脈のどの側面を反映している可能性があるか。
- ・ テキストの意味は固定化されたものであり、時代を経て変化することはないという主張について、どのように考えるか。
- ・ 「子供時代」などといった一定の用語や概念は、学習したテキストのなかの表現方法によって、どのように変化するか。
- ・ 文学テキストに対する私たちの批判的見地は、文化的な慣習によってどのように影響されるか。
- ・ 作家が時として文学作品において出来事を起こった順序どおりに書かないことがあるのは、どのような目的のためか。
- ・ 文学は抑圧された人々の声であるという主張は、どの程度有効か。
- ・ テキスト分析の際の批判的なアプローチは、特定の文化的慣習によってどの程度影響されるか。

これらのアイデアの代わりに、SL用に示された例も使うことができます。

この試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「試験問題2」の最高点は25点です。

## 記述課題

配点比率：20%

「記述課題」は、生徒がコースで学習した素材の1つの側面を探究する際に、想像力に富む方法を用いることができるかを測るものです。テキストまたはトピックのある1つの側面について、批判的に取り組むことが求められます。

生徒は、少なくとも4つの「記述課題」を作成し、そのうち2つを外部評価用に提出します。

「記述課題」は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。「記述課題」の最高点は各20点です。

### 教師による指導およびサポート

学習プロセスの一環として、生徒は、課題の最初の草稿を作成した段階で教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高められるかについてであり、教師が草稿に注釈をつけたり、編集を加えたりすることは認められません。この第1稿に全般的なコメントをした後は、教師がさらに援助することはできません。

## 課題1と課題2の形式的要件

- ・ 外部評価用に提出される課題のうち1つは、6つの設問のいずれかに対する批判的解答でなければなりません（課題2）。
- ・ 外部評価用に提出される課題のうちの1つは、コースのパート3またはパート4で学習した文学テキストに基づくものでなければなりません。残りの課題は、コースのパート1またはパート2で学習した素材に基づくものでなければなりません。
- ・ 各課題は800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）とし、課題1には「課題の解説」を200～300語（日本語の場合は400～600字）で添え、また課題2には「概要」を添付しなければなりません。語数（字数）制限を超過した場合は、課題1と課題2の最初の1000語（日本語の場合は2000字）と課題1の「課題の解説」の最初の300語（日本語の場合は600字）のみを評価の対象とします。

## 課題1の形式的要件

- ・ 課題1の内容は、コースの4つのパートのいずれかに関連していなければなりません。
- ・ テキストのタイプは、課題の内容に適切なものを生徒が自由に選択できます。
- ・ 課題1では、はじめに「課題の解説」を述べる必要があります。

**注：**小論文は、課題1のテキストのタイプとしては認められません。小論文は「試験問題2」と「記述課題2」で書くことが義務づけられています。

## 課題の解説

「課題の解説」は「記述課題」の語数（字数）（800～1000語）（日本語の場合は1600～2000字）には含まれません。長さは200～300語（日本語の場合は400～600字）とします。

「課題の解説」では、生徒は以下のことを説明します。

- ・「記述課題」の内容が、コースの特定のパートにどのように関連づけられているか。
- ・この課題では、コースの特定の側面をどのように探究することが意図されているか。
- ・選択した課題の性質
- ・受け手、目的、およびこの課題を取り巻く社会的、文化的、または歴史的な文脈についての情報

「課題の解説」には、学習したテキストやトピックについての知識を盛り込むだけでなく、作成したテキストで用いた表現技法、およびそれが課題のねらいにどのように関係するかについての情報も含むべきです。

## 課題 1 の実践時の要件

生徒は、必要に応じて成果物をサポートする画像を挿入することができます。これらは必ず課題の電子ドキュメントの中に組み込まなければならない、別のファイルとして作成したりハードコピーを添付したりすることはできません。評価用に提出する「記述課題」はワードプロセッサで作成し、電子ファイルは画像を含めて 2 MB 以下に収めます。

課題は、「言語 A」の学習言語で執筆します。

また、使用した情報源はすべて明示しなければなりません。文学テキストの主要な一節やイラストをはじめ、議論を喚起する素材を読み手が参照しなければ「記述課題」で生徒が達成しようとしていることを理解できない場合など、必要に応じてその出典素材を参考文献目録で明示しなければなりません。試験官がこれらの情報源を参照する可能性はありますが、評価の対象とはなりません。とはいえ、試験官にとって重要な情報です。また、これは、生徒が優れた学問的慣習を身につけることにもつながります。

## 教師の役割

- ・課題の選択、発展方法、難易度について生徒にアドバイスする。
- ・「記述課題」と議論を喚起する素材との間の関係を話し合う。
- ・トピックが、難易度、課題の語数（字数）、課題の目的のすべてにおいて適切であることを確認する。

## 課題 1 の例

「記述課題」の例を以下に示します。これらはいくつでも参考のみを目的としており、必ずしもすべてを網羅したものではなく、また必ず使用しなければならないものでもありません。

- ・文学テキストで起きる主な出来事とその作品の脇役である登場人物がどのように見たのかを描いた短い物語
- ・新しく制定された法律がある自治体にどのように影響するかを説明する公共情報文書

- ・ 小説の登場人物が、他の登場人物や小説内で起きる出来事について本当の気持ちを告白した日記の記述
- ・ 文学テキストの出来事を別の設定に持ち込んで書き直したエピソード
- ・ 広告において女性に対するステレオタイプがいかに蔓延しているか、また会社の利益を拡大するためにこれらのステレオタイプがいかに宣伝されているかを訴える論説

## 課題2のねらい

課題2は、批判的解答という形式をとり、HLコースのみの要件です。課題2のねらいは以下のとおりです。

- ・ 「言語A：言語と文学」の4つのパートで学習した素材を、さらに詳細に考察する。
- ・ 学習したテキストの中に存在する価値観、信念、態度についてより踏み込んで振り返り、問いかけをする。
- ・ テキストを幾通りもの視点から見よう生徒に促す。
- ・ 指定された設問の観点からテキストをどのように理解できるかについて、独自の解答を示す能力を養う。

## 課題2の形式的要件

以下の3つの各学習領域に対してそれぞれ2つの設問が指定されます。課題2は、これら6つの設問の**いずれか**に対する批判的解答です。これらの設問は、できるだけオープンなものになるよう設計されており、生徒が広範な領域のなかで設問に対する解答を探究し、発展させることができるようにつくられています。これらの設問は、どの試験セッションでも毎回同じものが使用されます。本資料の「課題2 — 設問」のセクションを参照してください。

批判的解答は、コースで学習した素材に基づいて作成します。小説や一群の詩のように長い作品をこの素材にすることもできます。また、新聞記事やスポーツに関するブログのように短いテキストを1つまたは複数用いることもできます。課題2に、「課題の解説」は**必要ありません**。代わりに、「概要」を作成する必要があります。この「概要」は、課題に添えて外部評価用に提出します。

「概要」は授業時間中に完成させ、次の点を含めなければなりません。

- ・ 選択した設問
- ・ 分析するテキストのタイトル
- ・ 課題に関連するコースのパート
- ・ 課題の重点を3～4つの主要ポイントにまとめた説明

必要に応じて、課題2では、新聞記事や雑誌広告など解答の基盤となった関連文書を参考文献目録にまとめる必要があります。

短いテキストの全文（新聞記事や雑誌広告など）を使用した場合は、他のテキストにも言及しながら解答を裏づけることができます。

批判的解答は、きちんとした形式の小論文の形をとり、導入部から始まり、見解や議論をしっかりと展開させたうえで結論へと続くよう明確に構成しなければなりません。

## 課題 2 の実践時の要件

課題 1 の実践時の要件に加えて、以下のことが義務づけられています。

- ・ 必要に応じて、批判的解答を作成した際に根拠としたテキストを参考文献目録にまとめ、成果物の提出時に添付する。

## 課題 2 の学習領域

課題 2 の準備として、生徒は以下の学習領域のいずれかに取り組まなければなりません。これらの学習領域は、コースの 4 つのパートで学習するトピックと素材に対応しています。

### 読者、文化とテキスト

テキストの意味が読者や文化的な文脈によって形づくられることを考察するよう、生徒に促します。テキストの解釈はさまざまな要因によって左右され、その要因には例えば以下のようなものがあります。

- ・ 読者とテキスト作成者の文化的アイデンティティー
- ・ 年齢
- ・ ジェンダー
- ・ 社会的地位
- ・ テキストとその作成を取り巻く歴史的・文化的な状況
- ・ 言語と翻訳

### 権力と特権

テキストにおいて、異なる社会集団はそれぞれどのように表現され、そしてそれはなぜなのかを考察するよう、生徒に促します。また、どの社会集団がテキストから除外され、テキストのなかで軽んじられ、あるいは沈黙させられているかについても、考察することができます。社会集団としては、次のようなものが考えられます。

- ・ 女性
- ・ 若者
- ・ 高齢者
- ・ 子ども
- ・ 移民
- ・ 少数民族
- ・ 職業

## テキストとジャンル

テキストが属するジャンルについて考察するよう、生徒は促されます。テキストにはジャンルによって特徴づけられるものがあり、それは特色ある読者や観衆を特定することで見分けられる場合があります。書き手は、特定の効果をあげるために、ジャンルに特有の表現技法を用いたり、あえてそれを外したりします。また生徒は、テキストがどのように他のテキストを借用しているか、テキストをどのように再形成、再構成できるかを探究することもできます。

ジャンルの表現技法の例としては、以下のようなものがあります。

- ・ 構成
- ・ 筋書き
- ・ 人物描写
- ・ スタイル（文体）上の技巧
- ・ 語調、心象、雰囲気
- ・ 言語使用域（レジスター）
- ・ 見た目、画像とレイアウト

以下の表は、HLの4つの「記述課題」として選ぶことのできる課題の範囲の例として示しています。さまざまなアイデアとテキストを多岐にわたる方法で探究することができます。

「記述課題」 シラバスのセクション	考えられるタイトルと説明	学習成果
課題1、パート3 評価用に提出	「人形の家から荒地へ?」。『人形の家』にシーンを追加し、家を出ることを決めたノラのその後を探究する。	テキストがつくられ、そして受けとられた歴史的、文化的、社会的な文脈の変化。 テキストによって表現される態度や価値観。
課題2、パート1	「気候変動についての討論」。2つの論説記事を書く。1つは中道左派のエコロジーをテーマにした雑誌向け、もう1つは右派の政治雑誌向けとする。「概要」では、雑誌によって言語と議論をどのように変えたかを説明する。	受け手と目的がテキストの構成と内容にどのように影響するか。 言語と意味が文化や文脈によってどのように形づくられるか。
課題3、パート3 および4	「別の人生」。文学テキストの登場人物のさまざまな側面を探究する。	文学作品の詳細な探究。 テキストによって表現される態度や価値観。 テキストのテーマと道徳的価値観の分析。

「記述課題」 シラバスのセクション	考えられるタイトルと説明	学習成果
課題 4、パート 1 および 2  評価用に提出	課題 2、設問 1：読者、文化 とテキスト	言語と意味が文化や文脈によってど のように形づくられるか。  受け手と目的がテキストの構成と内 容にどのように影響するか。  情報を伝えたり説得したりするた めに、マスメディアが言語をどのよ うに使用しているか。  メディアが政治とイデオロギーに及 ぼす影響

## 課題 2 — 設問

**注：**使用する文学テキストは、コースで学習したどのテキストでも構いません。また、「指定翻訳作品リスト」(P L T) のテキストを使うこともできます。

### 読者、文化とテキスト

1. あるテキストを 2 人の人間が読んだ時、その読み方と解釈はどのように異なる可能性があるか。

設問 1 を選択する生徒は、以下の例のようなテキストを取り上げることができます。

- ・ 小説『アウトサイダー』の第 1 編の最後の数ページが、アルジェリア独立戦争時のフランスとアルジェリアの読者によってどのように読まれた可能性があるかについての考察と分析
- ・ 脚本『大いなる幻影』の抜粋が、1930 年代初めと 1930 年代終わりにおけるフランスの一般市民によってどのように読まれた可能性があるかについての考察と分析
- ・ ある世界的指導者による、特定の集団や問題への言及がない演説（除外された集団は、その演説を異なる形で受け止めると考えられる）
- ・ 肥満を取り上げた記事に対するさまざまな見方についての考察と分析（この記事は、貧困と飢餓の問題を抱える国の人々と豊かな消費社会に住む人々との間では異なって受け止められる可能性がある）

2. そのテキストが別の時代に、別の場所で、別の言語で、または別の受け手のために書かれていたなら、どのように違っていたらうか。また、それはなぜか。

設問 2 を選択する生徒が取り上げることのできるテキストの例は以下のとおりです。

- ・ ある新聞記事が、別の新聞であればどのように書かれたか。
- ・ 1950 年代にティーンエイジャー向けに書かれた漫画やグラフィック・ノベルを、21 世紀のティーンエイジャー向けに書き直したらどのようなになるか。

- ・ 偏見をテーマに、人種や宗教などに関するさまざまな先入観に焦点をあてた文学作品についての考察と分析。
- ・ 厳然とした社会階級構造を有する国の社会階級について取り上げた記事の考察と分析（階級の違いを示す要素としての言語の重要性に焦点をあてる）。

### 権力と特権

1. 社会集団がどのように表現されているか。また、それはなぜか。  
設問1を選択する生徒が取り上げることのできるテキストの例は以下のとおりです。
  - ・ 「アーバン・トライブ」をネガティブな方法で表現した記事の考察と分析
  - ・ Alaa al Aswany の小説『*The Yacoubian Building*』における社会集団の描写
2. どの社会集団がテキストにおいて軽んじられ、除外され、あるいは沈黙させられているか。  
設問2を選択する生徒が取り上げることのできるテキストの例は以下のとおりです。
  - ・ 知的な人物が崇拜されている、または非難されている中国の小説
  - ・ 現代の大衆報道におけるロマ（Roma）の描写

### テキストとジャンル

1. テキストは特定のジャンルの表現技法にどのように倣っているか、またはそれから外れているか。それはどのような目的のためか。  
設問1を選択する生徒が取り上げることのできるテキストの例は以下のとおりです。
  - ・ 作家によるおとぎ話の改訂についての考察と分析
  - ・ ドラマチックな話、詩、手紙、旅行記などを使用している小説についての考察と分析
  - ・ 特定の形式、スタイル（文体）、言語使用域（レジスター）を用いたメディアのテキストについての考察と分析
2. テキストが、どのように他のテキストを借用しているか。また、それはどのような効果をあげているか。  
設問2を選択する生徒が取り上げることのできるテキストの例は以下のとおりです。
  - ・ 小説内のある登場人物が、歌の歌詞の中でどのように表現されているかについての考察と分析
  - ・ 政治演説における宗教的なイメージや引用についての考察と分析
  - ・ ボルヘスの『伝奇集』に収められたある1話についての考察と分析
  - ・ 『ロミオとジュリエット』に見られる宮廷風の愛の伝統的作法の使用についての考察と分析

## 外部評価規準 — 上級レベル（HL）

### 概要

評価課題はすべて、評価規準に基づいて評価されます。評価規準は本資料に記載されています。SLとHLでは、異なる評価規準が適用されます。

HLにおける外部評価規準の概要は以下のとおりです。

### 試験問題 1：テキスト比較分析

HLでは、以下の4つの評価規準があります。

規準A	テキストの理解と比較	5点
規準B	スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解	5点
規準C	構成と展開	5点
規準D	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>20点</b>

### 試験問題 2：小論文

HLでは、以下の5つの評価規準があります。

規準A	知識と理解	5点
規準B	設問に対する答え	5点
規準C	スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解	5点
規準D	構成と展開	5点
規準E	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>25点</b>

### 記述課題 1

HLでは、以下の4つの評価規準があります。

規準A	課題の解説	2点
規準B	課題と内容	8点
規準C	構成	5点
規準D	言語とスタイル（文体）	5点
	<b>合計</b>	<b>20点</b>

## 記述課題 2

HLでは、以下の4つの評価規準があります。

規準A	概要	2点
規準B	設問に対する答え	8点
規準C	構成と議論	5点
規準D	言語とスタイル（文体）	5点
	<b>合計</b>	<b>20点</b>

教師と生徒の参考用に、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

### 試験問題 1：テキスト比較分析（HL）

#### 規準A：テキストの理解と比較

- ・ 分析は、テキストの類似点と相違点をどの程度示しているか。
- ・ 分析は、テキストとそのタイプスタイル（文体）、目的、考えられる文脈（文化的な文脈、時代の文脈、受け手との関係など）についての理解を、どの程度示しているか。
- ・ 論評は、テキストを上手に選択して参照することにより裏づけられているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	テキストの文脈と目的、および類似点や相違点についての理解がほとんど見られない。要約が大半を占めており、テキストに言及することによって見解を裏づけることが、ほとんど行われていない。
2	テキストの文脈と目的、および類似点や相違点についての理解がいくらか見られる。テキストに言及することによっておおむね見解を裏づけている。
3	テキスト、考えられる文脈および目的、類似点や相違点についての十分な理解が見られる。論評が盛り込まれており、テキストに言及することによっておおむね見解を裏づけている。
4	テキスト、その文脈と目的、および類似点や相違点についての優れた理解が見られる。テキスト内の適切な箇所に言及することにより大部分の論評を裏づけている。
5	テキスト、その文脈と目的、および類似点や相違点についての非常に優れた理解が見られる。テキスト内の適切な箇所に言及することにより完全に論評を裏づけている。

## 規準B：スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解

- ・ 比較分析は、テキストのスタイル（文体）上の特徴、例えば言語、構成、語調、技法、様式などが、意味を構築するうえでどのように使われているかについての認識を、どの程度示しているか。
- ・ 比較分析は、スタイル（文体）上の特徴（視覚テキストの特徴を含む）が読者に与える効果についての認識を、どの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	スタイル（文体）上の特徴についての認識がほとんど見られず、読者に与える効果の例証もほとんどあるいはまったく見られない。
2	スタイル（文体）上の特徴についての認識がいくらか見られ、読者に与える効果がわずかに例証されている。
3	スタイル（文体）上の特徴についての十分な認識が見られ、読者に与える効果についての理解も見られる。
4	スタイル（文体）上の特徴についての優れた認識と例証、および読者に与える効果についての詳細な理解が見られる。
5	スタイル（文体）上の特徴についての非常に優れた認識と、読者に与える効果についての非常に優れた理解が見られる。

## 規準C：構成と展開

- ・ 比較分析をいかにうまく構成し、一貫性を保っているか。
- ・ どの程度バランスのとれた比較分析を行っているか（ここでの「バランス」とは、2つのテキストを均等に扱っていることを意味する）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	構成がほとんど見られず、バランスについての意識もまったく見られない。議論の展開が非常にわずかにしか見られない。一方のテキストにばかり焦点をあてており、もう一方のテキストが取り上げられていない。
2	構成がいくらか見られる。バランスについての意識はほとんど見られない。議論の展開はいくらか見られる。どちらのテキストにも言及しているが、片方の取り上げ方が表面的である。
3	比較分析はおおむね一貫性のある形で構成されている。バランスについての意識があり、議論が十分に展開されている。

評点	レベルの説明
4	比較分析がよく構成されていて、バランスもとれている。構成は大部分に一貫性があり、議論が高度に展開されている。
5	比較分析はバランスがよくとれていて、構成も効果的である。一貫性のある効果的な構成と展開になっている。

### 規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	言葉遣いは、ときどき明確かつ注意深く選択されている。文法、語彙、構文は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も多少の誤りはあるものの十分に正確である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。
4	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も優れて正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。
5	言葉遣いは非常に明確であり、効果的に、かつ注意深く選択されており、的確である。文法、語彙、構文もきわめて正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。

## 試験問題2：小論文（HL）

### 規準A：知識と理解

- ・ 設問への答えに関連させて、パート3の作品とその文脈についての知識と理解をどの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	パート3の作品と文脈がどのように意味に影響を及ぼすかについての知識がほとんど示されていない。

評点	レベルの説明
2	パート3の作品と文脈が意味にどのように影響を及ぼすかについての知識がときどき例証されている。理解は表面的である。
3	パート3の作品と文脈が意味にどのように影響を及ぼすかについての十分な知識が例証されており、十分な理解が示されている。
4	パート3の作品と文脈が意味にどのように影響を及ぼすかについての知識が適切に例証されており、優れた理解が示されている。
5	パート3の作品と文脈が意味にどのように影響を及ぼすかについての知識が徹底的に、かつ説得力のある方法で例証されており、洞察力のある理解が示されている。

### 規準B：設問に対する答え

- ・ 設問の意図をどの程度理解しているか。
- ・ 答えは、設問の意図にどの程度関連づけられているか。批判的分析は、どの程度示されているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	設問の意図に対する認識がほとんど見られない。
2	設問の意図に対する認識がいくらか見られる。答えは部分的にしか関連性がなく、大部分が根拠のない一般論になっている。
3	設問の意図に対する十分な認識が見られる。答えはおおむね関連性が高く批判的である。
4	設問の意図に対する優れた理解が見られ、設問の機微についての理解もいくらか見られる。答えは一貫して関連性が高く批判的である。
5	設問の意図に対する非常に優れた理解が見られ、設問の機微についての理解も大いに見られる。答えは関連性が高く、焦点が絞られており、洞察に富んでいる。

### 規準C：スタイル（文体）上の特徴およびその効果についての理解

- ・ 小論文は、そのテキストで著者がどのようにスタイル（文体）上の特徴（例えば、人物描写、設定、テーマ、語り手の視点、構成、スタイル（文体）、技法など）を選び、意味を構築するために使用しているかについての認識を、どの程度示しているか。
- ・ 小論文は、スタイル（文体）上の特徴の効果についての理解を、どの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	スタイル（文体）上の特徴の使い方についての認識と例証が限定的に見られる。
2	スタイル（文体）上の特徴の使い方についての認識と例証がいくらか見られ、その効果についての限定的な理解も見られる。
3	スタイル（文体）上の特徴の使い方についての十分な認識と例証、およびその効果についての十分な理解が見られる。
4	スタイル（文体）上の特徴の使い方についての優れた認識と例証、およびその効果についても優れた理解が見られる。
5	スタイル（文体）上の特徴の使い方についての非常に優れた認識と例証、およびその効果についても非常に優れた理解が見られる。

### 規準D：構成と展開

- ・小論文の議論は、どの程度論理的かつ高度に展開されているか。
- ・小論文の形式上の構成は、どの程度効果的で、かつ一貫性を保っているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	ほとんど焦点が絞られておらず、構成や見解のつながり、議論の展開がほとんど見られない。
2	やや焦点が絞られていて、構成や見解のつながり、議論の展開がいくらか見られる。
3	十分に焦点が絞られていて、十分な構成や見解のつながり、議論の展開が見られる。
4	よく焦点が絞られていて、優れた構成が見られる。見解のつながりと議論の展開が論理的である。
5	綿密に焦点が絞られていて、非常に優れた構成が見られる。見解のつながりに一貫性があり、徹底して議論が展開されている。

### 規準E：言語

- ・言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	言葉遣いは、ときどき明確かつ注意深く選択されている。文法、語彙、構文は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も多少の誤りはあるものの十分に正確である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。
4	言葉遣いは明確かつ注意深く選択されており、文法、語彙、構文も優れて正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。
5	言葉遣いは非常に明確であり、効果的に、かつ注意深く選択されており、的確である。文法、語彙、構文もきわめて正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。

## 記述課題 1（HL）

### 規準 A：課題の解説

- ・「課題の解説」は、探究するコースの側面と「記述課題」の関連性を説明しているか。

注：「課題の解説」の語数（字数）は 200～300 語（日本語の場合は 400～600 字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、1 点減点されます。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	探究する側面についての説明と理解がいくらか示されている。
2	探究する側面についての明確な説明と理解が示されている。

### 規準 B：課題と内容

- ・「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解を、どの程度示しているか。
- ・選択した課題に対して内容はどの程度適切か。
- ・選択したテキストのタイプで使われる表現技法についての理解を、どの程度示しているか。

「試験問題2」で作成されるような小論文は、「記述課題」のテキストのタイプとしては適切ではありません。このような小論文を提出した場合、この規準での高得点はのぞめません。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解が表面的である。 選択した課題に対しておおむね不適切な内容である。 選択したテキストのタイプで使われる表現技法についての理解が表面的である。
3～4	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する理解が大部分において十分に見られる。 選択した課題に対しておおむね適切な内容である。 選択したテキストのタイプで使われる表現技法についての十分な理解が示されている。
5～6	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する優れた理解が示されている。 選択した課題に対して大部分が適切な内容である。 選択したテキストのタイプで使われる表現技法についての優れた理解が示されている。
7～8	「記述課題」で扱っているトピックやテキストに対する非常に優れた理解が示されている。 選択した課題に対して一貫して適切な内容である。 選択したテキストのタイプで使われる表現技法についての非常に優れた理解が示されている。

### 規準C：構成

- ・「記述課題」をいかにうまく構成しているか。
- ・構成にどの程度一貫性があるか。

注：「記述課題」の語数（字数）は800～1000語（日本語の場合は1600～2000字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、2点減点されます。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	まとまりや構成がほとんど見られない。
2	まとまりや構成がいくらか見られるが、一貫性がない。

評点	レベルの説明
3	まとまりがあり、構成におおむね一貫性がある。
4	うまくまとめられており、構成は大部分において一貫性がある。
5	効果的にまとめられており、構成は一貫性があり効果的である。

### 規準D：言語とスタイル（文体）

- ・ 言語とスタイル（文体）をどの程度効果的に使用しているか。
- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、慣用句などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ。レジスターは課題自体について評価される）。

**注：**適切な「課題の解説」を書いたものの、「記述課題」で適切な言語使用域（レジスター）を使用しなかった場合は、最高点が3点となります。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確な部分がほとんどなく、基本的な誤りが随所に見られる。レジスターとスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	明確な部分がいくらかあるが、文法、スペル（誤字脱字）、構文はしばしば不正確である。レジスター、スタイル（文体）、適切な語彙についての認識がいくらか見られる。
3	言葉とスタイル（文体）はおおむね明確かつ効果的に使用されているが、文法、スペル（誤字脱字）、構文はやや不正確である。レジスター、スタイル（文体）、語彙はおおむね適切である。
4	言葉とスタイル（文体）が明確かつ効果的に使用されており、精度も高い。構文と語彙に幅があり、スタイル（文体）の成熟度を示している。レジスターは適切である。
5	言葉とスタイル（文体）が非常に明確かつ効果的に使用されており、精度も非常に高い。構文と語彙が優れており、スタイル（文体）に自信が感じられる。レジスターは効果的である。

## 記述課題 2：批判的解答（HL）

### 規準 A：概要

- ・「記述課題」の「概要」が、課題の具体的な要点を明確に示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	「概要」が、課題の具体的な要点を部分的に示している。
2	「概要」が、課題の具体的な要点を明確に示している。

### 規準 B：設問に対する答え

- ・設問の意図をどの程度理解しているか。
- ・答えは、設問の意図にどの程度関連づけられ、焦点が絞られているか。
- ・テキスト内の適切な箇所に言及することにより答えを裏づけているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	設問の意図に対する理解が表面的である。 関係性のない見解がしばしば述べられている、または同じ見解が繰り返し述べられている。 テキストに言及することによって答えを裏づけていない。
3～4	設問の意図に対する十分な理解が大部分で見られる。 見解はおおむね関連性があり、焦点が絞られている。 テキストに言及することによっておおむね答えを裏づけている。
5～6	設問の意図に対する優れた理解が見られる。 見解は大部分で関連性があり、焦点が絞られている。 テキスト内の適切な箇所に言及することにより大部分で答えを裏づけている。
7～8	設問の意図に対する徹底した理解が見られる。 見解は関連性があり、焦点が絞られている。 テキスト内の適切な箇所に言及することにより完全に答えを裏づけている。

### 規準 C：構成と議論

- ・「記述課題」をいかにうまく構成しているか。
- ・構成にどの程度一貫性があるか。
- ・「記述課題」の議論をどの程度高度に展開させているか。

**注：**「記述課題」の語数（字数）は 800～1000 語（日本語の場合は 1600～2000 字）です。語数（字数）制限を超過した場合は、2 点減点されます。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	まとまりや構成がほとんど見られない。議論の展開がほとんどない。
2	まとまりや構成がいくらかあるが、一貫性がない。議論はいくらか展開されている。
3	まとまりがあり、構成はおおむね一貫性がある。議論はいくらか展開されている。
4	うまくまとめられており、構成は大部分において一貫性がある。議論の展開が明確である。
5	効果的にまとめられており、構成に一貫性がある。議論の展開が効果的である。

### 規準D：言語とスタイル（文体）

- ・ 言語とスタイル（文体）をどの程度効果的に使用しているか。
- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が課題に対して適切な語彙、語調、構文、慣用句などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ。レジスターは課題自体について評価される）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確な部分がほとんどなく、基本的な誤りが随所に見られる。レジスターとスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	明確な部分がいくらかあるが、文法、スペル（誤字脱字）、構文はしばしば不正確である。レジスター、スタイル（文体）、適切な語彙についての認識がいくらか見られる。
3	言葉とスタイル（文体）はおおむね明確かつ効果的に使用されているが、文法、スペル（誤字脱字）、構文はやや不正確である。レジスター、スタイル（文体）、語彙はおおむね適切である。
4	言葉とスタイル（文体）が明確かつ効果的に使用されており、精度も高い。構文と語彙に幅があり、スタイル（文体）の成熟度を示している。レジスターは適切である。
5	言葉とスタイル（文体）が非常に明確かつ効果的に使用されており、精度も非常に高い。構文と語彙が優れており、スタイル（文体）に自信が感じられる。レジスターは効果的である。

## 内部評価

### 内部評価の目的

内部評価は、コースを構成する不可欠の要素であり、SLとHLを履修する生徒は必ず取り組まなければなりません。生徒は、内部評価を通じて、習得したスキルと知識を活用できることを示します。内部評価のための課題に向けた準備は、通常の授業の一環として行わなければなりません。

内部評価では、SLとHLで同じ課題と規準を用います。口述の評価要素では、さまざまな文脈における聞くスキルと話すスキルが総合的に評価されます。

「言語A：言語と文学」の内部評価は、必須である2つの「口述課題」で構成されています。これは「言語A」の学習言語で行わなければなりません。

1. **個人口述コメントリー**—これは録音され、モデレーション（評価の適性化）のためにIBに提出されます。
2. **口述課題（発展）**—これは録音されず、モデレーション（評価の適性化）のためにIBに提出されることもありません。

### 指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

内部評価のためにSLとHLで提出される「口述課題」は生徒本人が取り組んだ学習成果物でなければなりません。以下の点について生徒にきちんと理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 内部評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準（生徒は、評価課題を通じて与えられた評価規準に効果的に取り組むべきことを理解しなければなりません。）

「個人口述コメントリー」では、使用する作品（または作品の一節）を生徒が事前には知ることはできません。「口述課題（発展）」は、生徒本人の成果物でなければならず、また話す内容を全文書き出しておいて読むことは許可されていません。生徒本人が取り組んだものであるかどうかについては、成果物の内容についての生徒とのディスカッションと、生徒が使用したメモ（使用した場合のみ）を通じて、チェックすることが可能です。

教師と生徒が内部評価用の学習成果物のカバーシートに署名することは、モデレーション（評価の適正化）を図るために試験官にサンプルとして提出する学習成果物だけに適用されるものではありません。すべての生徒の学習成果物に適用されます。教師と生徒がカバーシートに署名をした場合でも、その学習成果物が本当に生徒本人によって取られ

たものであるかどうか疑問を呈するコメントがある場合、その学習成果物は採点対象外となります。その項目の評点は与えられず、成績評価も与えられません。詳細は、IB資料『学問的誠実性』と同『一般規則：ディプロマプログラム』を参照してください。

## 協同作業

評価のために生徒が協同作業をすることは、「口述課題（発展）」においてのみ認められます。ただし、これは必須ではありません。生徒が協同作業をする場合は、生徒それぞれがグループの取り組みに十分に貢献し、またその貢献を評価規準に従って明確に評価することが重要です。生徒はそれぞれ、「口述課題（発展）」に対して個別の評価を受けます。グループ全体に同じ評点をつけるのは適切ではありません。

「個人口述コメントリー」は、グループ単位で行うことはできません。

## 時間配分

内部評価は「言語A：言語と文学」におけるきわめて重要な要素です。SLとHLのいずれにおいても、最終評価の30%を占めます。この配点比率は、課題に取り組むのに必要な知識、スキル、および理解を指導するための授業時間、ならびに課題に取り組むために必要な時間の合計にも反映されなければなりません。

2年間のコースの間は、以下の点を考慮しなければなりません。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 授業中に生徒が内部評価課題に取り組む時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 見直し、および進行状況を確認する時間

## 内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、特定の到達レベルを示す「レベルの説明」と、それに付随する評点が明示されています。「レベルの説明」では、主に達成できた成果に注目していますが、到達度の低いレベルでは、達成できなかった点を規準に含む場合もあります。

教師が標準レベル（SL）および上級レベル（HL）の内部評価課題を採点する際は、「レベルの説明」を使用して評価規準に照らして判断しなければなりません。

- ・ SLとHLには同じ評価規準が設定されています。
- ・ ベストフィット（適合）モデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達度を最も適切に示すレベルを見つけます。評価課題の到達度が規準に示されている要素によって異なる場合に補正を行うというのが、ベストフィット（適合）のアプローチの考え方です。与えられる評点は、規準に照らした場合に、到達度のバ

ランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その評点が得られないということではありません。

- ・生徒の成果物を評価する際、教師は、評価規準で学習成果物のレベルを最も的確に示している説明に到達するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。成果物が2つの説明のちょうど中間にあたると見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・1つのレベルに複数の評点が割りあてられている場合、生徒の成果物について、説明内容を達成している度合いが大きければ（課題がその上のレベルに到達しそうな場合）、高いほうの評点を与えます。説明内容を達成している度合いが小さければ（その下のレベルに近い場合）、低いほうの評点を与えます。
- ・整数のみを用います。分数や小数などの部分点は認められません。
- ・教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・「レベルの説明」にある最高レベルは、欠点のない完ぺきな出来を意味するものではありません。最高レベルとは、生徒が到達し得るものであるべきです。成果物が最高レベルの説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高評点を与えることを躊躇してはなりません。
- ・1つの規準において到達度の高かった生徒が、他の規準においても到達度が高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達度の低かった生徒が、他の規準においても到達度が低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価がある特定の評点につながることを想定すべきではありません。
- ・評価規準を生徒に示すことが推奨されています。

## 内部評価の詳細—標準レベル（SL）および上級レベル（HL）

### 個人口述コメントリー

配点比率：15%

「言語A：言語と文学」のパート4で学習した作品からの特定の抜粋箇所を、批判的に考察します。そして、特定の文学テキストにおける形式的な要素と意味との間の関係を分析します。

「個人口述コメントリー」では、抜粋箇所についての文学的な分析を行うことが求められます。生徒は、すべてのケースにおいて、抜粋の重要な側面を探究し、そのテキストについての知識と理解を示すとともに、文学的特徴の使い方とその効果についての知識と理解も示すべきです。

「個人口述コメントリー」は録音され、外部モデレーションのためIBに提出されます。「個人口述コメントリー」の最高点は30点です。

## 抜粋箇所の選択

抜粋箇所は、教師が責任をもって選択します。生徒が抜粋箇所や抜粋元を選択することは認められません。SL、HLともに、パート4で学習したすべての作品のなかからテキストを選択します。「個人口述コメントリー」の素材となるテキストを生徒に事前に知らせてはなりません。

テキストは40行以内とします。十分な詳細記述を含んでいて、評価規準に照らして評価できるだけの徹底的な考察が可能なテキストでなければなりません。

詩を選択する場合は、1編の完結した詩を選択するか、長い詩からかなりの部分にわたって抜粋する必要があります。また、他のジャンルの作品から選択する素材と比較して同じくらいの難易度とすべきです。

## 要件

「個人口述コメントリー」は15分間とします。

準備時間は最長20分間とします。

「個人口述コメントリー」は、パート4の作品をすべて学習するまで実施すべきではありません。生徒には実施日を十分に前もって知らせ、実施上の具体的な情報も事前に提供します。

「個人口述コメントリー」は、外部モデレーションのため録音することが求められています。録音の提出方法は、IB資料『DP手順ハンドブック』で毎年指定されます。

## 抜粋の数

「個人口述コメントリー」用に選択する抜粋テキストの数は、1クラスの生徒数によって異なってきます。同じクラス内の生徒がそれぞれ異なる抜粋を与えられ、また、学習したパート4の作品すべての中から抜粋を選択するのが理想です。最小限必要な生徒数別の抜粋の数は、以下のとおりです。

生徒数	必要とされる抜粋の数
1～5	生徒1人につき1
6～10	6
11～15	7
16～20	8
21～25	9
26～30	10

## 準備時間

生徒には、注釈などがつけられていない抜粋のコピーを渡します。準備時間の目的は、生徒がテキストのあらゆる側面を考慮して、コメントリーを構成できるようにすることです。

生徒はそれぞれ別室で、監督を受けながら「個人口述コメントリー」の準備をしなければなりません。参考にするための短いメモを作成すべきですが、用意したスピーチのようにそのメモを読み上げることはできません。準備時間中は、抜粋テキスト、「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）および筆記具だけを使用します。

## 「考察を促す問い」

準備時間の始めに、コメントリー用の抜粋テキストに加えて、2つの「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）のコピーを生徒に渡します。これらの問いは、番号をつけずに提示します。

教師は、テキストで何が起きているか、または何が論じられているかを問う設問を1つ、テキストで使われている言語について問う設問を1つ用意すべきです。これらの問いは、以下のようなものにします。

- ・ コメントリーの出発点となり得る手がかりを提供する。
- ・ テキストの最も重要な側面のひとつと関係している。
- ・ 全般的な詳細にのみ言及し、テキストの特定の行の具体的詳細などには触れない。
- ・ テキストで取り上げられている重要な問題点すべてを生徒が独自に探究できるようにする。
- ・ テキストの解釈に集中するよう生徒に促す。

「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）の例は、以下のとおりです。ただし、これらの問いを無作為に選んで使うべきではありません。テキストと問いの間には明確な関係性がなければなりません。

- ・ テキストの構成が、テキストの全体的な意味にどのように呼応しているか。
- ・ 見解や態度、感情を伝えるために、どのようなスタイル（文体）の要素が使われているか。
- ・ 語り手の視点は、読者のテキストの理解にどのように影響しているか。
- ・ このテキストは、どのような受け手を想定して書かれているか。
- ・ このテキストは、XとYとの関係について何を語っているか。
- ・ このテキストの主なテーマや考え方は何か。それはどのように展開されているか。
- ・ 筆者はこのテキストでどのような雰囲気をつくろうとしているか。

## コメントリー

コメントリーでは、一貫性のある整理された方法で考えを伝える能力を示すことが期待されています。テキストについてのバラバラなポイントを連ねて列挙すべきではありません。

また、コメントリーにとって適切な言語使用域（レジスター）を使用することが期待されています。

コメントリーは、与えられたテキストのみに焦点を絞ったものでなければなりません。例えば小説からの抜粋であれば、作品全体との関係や同じ作家の他の作品との関係は、関連性がある場合にのみ言及すべきです。

抜粋元のテキストについて知っていることをすべて述べる機会としてコメントリーを利用すべきではありません。「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）への答えをコメントリーに統合することが推奨されます。

教師は、生徒が中断されずにテキストを分析できるようにします。教師は、理解のある聞き手としてのみ行動すべきであって、生徒のコメントリーを再構成しようと試みてはなりません。教師は、生徒に励ましが必要な場合、生徒がコメントリーを継続するのが困難な場合、あるいは生徒がテキストを論評できずにいる場合にのみ介入します。

コメントリーは、10分前後とします。

## ディスカッションとその後の質疑

通常、このディスカッションには5分前後の時間をとります。

生徒がコメントリーを終えた時点で、教師がその生徒とディスカッションをすることが期待されています。このディスカッションを通じて、生徒は、コメントリー内で述べた特定の主張についてさらに詳しく説明する機会を得ます。

あまり自信のない生徒の場合は、教師が「考察を促す問い」（ガイディング・クエスチョン）に基づいて生徒の考えを引き出し、疑わしい主張を改善させたり、さらに詳しく述べたりする機会を与えなければなりません。

教師は、生徒が抜粋内の特定の詳細事項を理解し、その重要性を認識したことを確認しなければなりません。

また、生徒が作品全体におけるそのテキストの重要性を理解したこと、また完結した詩を使用した場合は、学習した他の詩とその詩との関係を理解したことも確認しなければなりません。

この課題の詳細な手順は、IB資料『DP手順ハンドブック』に記載されています。

## 口述課題（発展）

### 配点比率：15%

「口述課題（発展）」は、言語、意味および文脈の関係に注目するための課題です。

生徒は、「口述課題（発展）」を少なくとも2つ完了する必要があります。そのうち1つはパート1、もう1つはパート2に基づいたものでなければなりません。最も高い評点を最終評価に提出し、他の評点は学校が記録・保管します。

この課題は、パート1とパート2のトピックと学習成果のいくつかを探究する機会となります。この課題の根底にあるのは、多様な文化の理解です。生徒は、テキストの文化的な文脈をその伝達に使われる手段や媒体も含めて考察することにより、多様な文化の理解

のプロセスを経験し、自分の文化的慣習について振り返ることができるようになります。この課題では、さまざまなアクティビティーを使うことができます。個人のプレゼンテーションとすることもできれば、インタラクティブな性質のものにして、聞くスキルと話すスキルの両方を統合することもできます。生徒は、教師と相談したうえでアクティビティーを選択し、学習成果のいずれか1つ（あるいは複数）に関連づけます。

この課題を完了した後、生徒は、課題についての振り返りを口頭で行わなければなりません。これには、自分の進歩と、以前に立てた目標をどこまで達成できたかについての論評を含める必要があります。これは学校が保管しますが、IBの評価部門から提出を求められることがあります。

この課題とコースのいずれかのパートで学習したテキストとの間には、明らかな関係性が必要です。

この課題は、録音して外部モデレーションに提出する必要はありません。「口述課題（発展）」の最高点は30点です。

### 「口述課題（発展）」の例

この課題におけるアクティビティーの例を、以下に示します。このリストは、必ずしもすべてを網羅したものではなく、また必ず使用しなければならないものでもありません。

#### 目的に沿ったグループ・ディスカッション

- ・ 少人数の生徒が用意した素材に基づくディスカッション。例えば、あるテキストがとっている社会的、文化的、経済的な立場を特定する。
- ・ 2、3人の生徒が特別な役割（事前の準備、トピックの特定、簡単なレポート作成、論争を呼びそうな立場の表明など）を担って進めるクラス全体のディスカッション。クラスの生徒全員が参加できるが、特別な役割を担った2、3人の生徒のみが個別に評価の対象となる。
- ・ クラスでのディスカッションに使えるような素材のプレゼンテーション。例えば、ある1つのテキストについて対立する2つの読み方を提案する。
- ・ 形式に則ったディベート

#### ロールプレイ

- ・ 2人の著名人の対話。これに続いて、意味がどのように構築されるかを話し合うディスカッションを行う。
- ・ 生徒による著名人へのインタビュー。生徒は自分自身として、あるいは別の誰か（例えば、仲間の政治家など）になってインタビューを行う。
- ・ 会議において、製品やブランド、または著名人についての見方を言葉で巧みに誘導しようとする広告や広報の関係者

### 戯曲風のプレゼンテーション

- ・ パート1またはパート2の学習で直面した問題についてのシーンを書き、上演する。
- ・ 異なる焦点や解釈を念頭に置いて、特定の文化的または歴史的な瞬間を再現する。

### 口述プレゼンテーション

- ・ パート1またはパート2で学習した側面に基づいた正式なスピーチ
- ・ パート1またはパート2の側面に関係したレポート。例えば、同じトピックに関する2つの新聞記事を比較して、新聞がとっている立場を特定する。
- ・ 特定のトピックの紹介。例えば、あるテキストの社会的・文化的な文脈を説明する。
- ・ あるテキストや出来事の特定の解釈についての考察
- ・ ある著者のテキストの設定と別の素材との対比。例えば、社会的な背景や政治的見解などの詳細を対比する。
- ・ 学習したテキストにおける特定の画像、見解、シンボルの使用についてのコメントリー
- ・ パート1またはパート2で学習した2つのテキストの比較
- ・ あるテキストに対する生徒の反応の説明
- ・ テキストとしての画像についてのプレゼンテーション
- ・ ある視覚テキストで使われている「暗号」に焦点をあてたプレゼンテーション

## 内部評価規準 — S L ・ H L

### 概要

#### 個人口述コメントリー

S L、H Lともに4つの評価規準があります。

規準A	テキストまたは抜粋についての知識と理解	10点
規準B	文学的特徴およびその効果についての理解	10点
規準C	構成	5点
規準D	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>30点</b>

## 口述課題（発展）

S L、H Lともに4つの評価規準があります。

規準A	テキストとその主題または抜粋についての知識と理解	10点
規準B	言語の使われ方についての理解	10点
規準C	構成	5点
規準D	言語	5点
	<b>合計</b>	<b>30点</b>

教師と生徒の参考用に、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

## 個人口述コメントリー（S L・H L）

### 規準A：テキストまたは抜粋についての知識と理解

- ・コメントリーは、テキストについての知識と理解をどの程度示しているか。
- ・テキスト内の適切な箇所に言及することで論評を裏づけているか。

**注：**コメントリーに使用するテキストは、「指定作家リスト」（P L A）に記載の作品から抜粋しなければなりません。この条件を満たさなかった場合、この規準の最高点は6点となります。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	テキストについての知識が限定的に示されている。テキストについての理解はほとんどあるいはまったく見られない。テキストに言及することによって論評を裏づけることがほとんど行われていない。
3～4	テキストについての知識と理解が表面的に示されている。テキストに言及することによって論評をときどき裏づけている。
5～6	テキストについての十分な知識と理解が示されている。論評はテキストに言及することによっておおむね裏づけられている。
7～8	テキストについての優れた知識と理解が示されている。テキスト内の適切な箇所に言及することにより論評を裏づけている。
9～10	テキストについての非常に優れた知識と理解が示されている。テキスト内の適切な箇所に言及することにより効果的に論評を裏づけている。

## 規準B：文学的特徴およびその効果についての理解

- ・ コメンタリーは、テキストの文学的特徴、例えば、構成、技法、スタイル（文体）などが、意味を構築するのにどのように使われているかについての認識を、どの程度示しているか。
- ・ コメンタリーは、文学的特徴の効果についての理解をどの程度示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	文学的特徴についての認識がほとんど見られず、読者に与える効果の例証もほとんどあるいはまったく見られない。
3～4	文学的特徴についての認識がいくらか見られ、読者に与える効果がわずかに例証されている。
5～6	文学的特徴についての十分な認識と例証が見られ、読者に与える効果についての理解も見られる。
7～8	文学的特徴についての優れた認識、および読者に与える効果についての詳細な理解が見られる。
9～10	文学的特徴についての非常に優れた認識と例証、および読者に与える効果についての非常に優れた理解が見られる。

## 規準C：構成

- ・ コメンタリーをいかにうまく構成しているか。
- ・ 構成にどの程度一貫性があるか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	まとまりや構成がほとんど見られない。
2	まとまりや構成がいくらか見られる。
3	十分にまとめられており、構成はおおむね一貫性がある。
4	うまくまとめられており、構成は大部分において一貫性がある。
5	非常に効果的にまとめられており、構成は一貫性があり効果的である。

## 規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒がコメンタリーにとって適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法と構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	明確かつ適切な言葉遣いがときどき見られる。文法と構文はおおむね正確だが、誤りや矛盾が目立つ。コメントリーに適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは大部分で明確かつ適切であり、文法と構文も十分に正確である。コメントリーに適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。
4	言葉遣いは明確かつ適切であり、文法と構文の精度も高い。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、コメントリーに適切である。
5	言葉遣いは非常に明確かつ全体にわたって適切であり、文法と構文の精度も非常に高い。レジスターとスタイル（文体）は一貫して効果的で、コメントリーに適切である。

## 口述課題（発展）（SL・HL）

### 規準A：テキストとその主題または抜粋についての知識と理解

- ・ 口述課題に選んだテキストと主題についての知識と理解を、どの程度示しているか。
- ・ 主題に関するテキストの意味についての認識と理解を示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	テキストと主題についての知識が限定的に示されている。選択したテキストと主題についての理解がほとんどあるいはまったく示されていない。
3～4	テキストについての知識と理解、および選択した主題に関するテキストの意義についての認識がいくらか示されている。
5～6	テキストについての十分な知識と理解、および選択した主題に関するテキストの意義についての十分な認識が示されている。
7～8	テキストについての優れた知識と理解、および選択した主題に関するテキストの意義についての優れた認識が示されている。
9～10	テキストについての非常に優れた知識と理解、および選択した主題に関するテキストの意義についての非常に優れた認識が示されている。

## 規準B：言語の使われ方についての理解

- ・ 意味を形成するために言語がどのように使われるかについての理解を、どの程度示しているか。
- ・ テキストで特定の効果を生むために言語とスタイル（文体）がどのように使われているかについての認識を示しているか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	意味を形成するのに言語がどのように使われるかについての理解が表面的に示されている。言語とスタイル（文体）の使われ方についての認識がほとんど示されていない。
3～4	意味を形成するのに言語がどのように使われるかについての理解、および言語とスタイル（文体）の使われ方についての認識がいくらか示されている。
5～6	意味を形成するのに言語がどのように使われるかについての十分な理解、および言語とスタイル（文体）の使われ方についての十分な認識が示されている。
7～8	意味を形成するのに言語がどのように使われるかについての優れた理解、および言語とスタイル（文体）の使われ方についての優れた認識が示されている。
9～10	意味を形成するのに言語がどのように使われるかについての非常に優れた理解が示されている。言語とスタイル（文体）の使われ方についての詳細かつ徹底した認識が示されている。

## 規準C：構成

- ・ 「口述課題」をいかにうまく構成しているか。
- ・ 構成にどの程度一貫性があるか。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	まとまりや構成がほとんど見られない。
2	まとまりや構成がいくらか見られる。
3	まとまりがあり、構成におおむね一貫性がある。
4	うまくまとめられており、構成に大部分で一貫性がある。
5	効果的にまとめられており、構成に一貫性があり効果的である。

## 規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒が口述課題（発展）にとって適切な語彙、語調、構文、慣用句などの要素を使用することを「レジスター」と呼ぶ）。

評点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法と構文の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。
2	明確かつ適切な言葉遣いがときどき見られる。文法と構文はおおむね正確だが、誤りや矛盾が目立つ。口述課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。
3	言葉遣いは大部分で明確かつ適切であり、文法と構文も十分に正確である。口述課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。
4	言葉遣いは明確かつ適切であり、文法と構文の精度も高い。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、口述課題に適切である。
5	言葉遣いは非常に明確かつ全体にわたって適切であり、文法と構文の精度は非常に高い。レジスターとスタイル（文体）は一貫して効果的で、口述課題に適切である。

## 指示用語の解説

### 指示用語と定義

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は、以下の定義に基づいて理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合があります。

分析しなさい (Analyse)	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
コメントしなさい (Comment)	与えられた記述または計算結果に基づき、見解を述べなさい。
比較しなさい (Compare)	2つ（またはそれ以上）の事物または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
比較・対比しなさい (Compare and contrast)	2つ（またはそれ以上）の事物または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比しなさい (Contrast)	2つ（またはそれ以上）の事物または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
論じなさい (Discuss)	いくつかの議論、要素、または仮説を取り上げ、それらについて熟考し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な証拠（エビデンス）を挙げて、はっきりと述べなさい。
考察しなさい (Examine)	論点の前提および相互関係が明らかになるように、主張または概念について熟考しなさい。
説明しなさい (Explain)	理由や要因を含む、詳しい事情を述べなさい。
探究しなさい (Explore)	何かを発見するための系統立ったプロセスに取り組みなさい。
正当化しなさい (Justify)	解答または結論を裏づける、有効な理由または証拠（エビデンス）を述べなさい。
どの程度 (To what extent)	議論または概念の利点を熟考しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切な証拠（エビデンス）および論理的に正しい論拠をもたせなさい。